

青野原俘虜収容所開設 100 周年事業

加西に捕虜がいた頃

——青野原収容所と世界——

Als die Kriegsgefangenen in Kasai lebten...



『加西に捕虜がいた頃』刊行の辞

このたび『加西に捕虜がいた頃』を刊行する運びとなりました。加西に捕虜がいた頃というのは、今からちょうど100年ほど前のことになります。当時は、第一次世界大戦とのちに呼ばれることになる戦争下にあつて、加西市の青野原に捕虜収容所が設置されて、500名ほどの捕虜が収容されていました。この戦争の主な舞台はヨーロッパで、中欧列強と呼ばれるドイツ、オーストリア＝ハンガリー、オスマンと協商諸国と呼ばれるフランス、イギリス、ロシアとの間で激しい戦闘が繰り広げられました。

日本は当時イギリスとの間で同盟関係を結んでおり、その誼でドイツが東洋に有していた山東半島の租借地、中でも重要な軍事的拠点だった青島を攻略して、4,700人ほどの兵士を捕虜としました。捕虜たちは日本国内に移送され、大抵は日露戦争で捕虜になったロシア兵が収容されていた寺院などに収容されました。開戦からほぼ一年が経過した段階で、日本政府は戦争の長期化に備えて、恒久的な収容施設の建設に着手しました。その一つが青野原に設置された収容所で、主に福岡と姫路に収容されていた捕虜がここに移送されることになりました。そのことが、500人収容という小規模な青野原収容所に独特な相貌を与えることになりました。

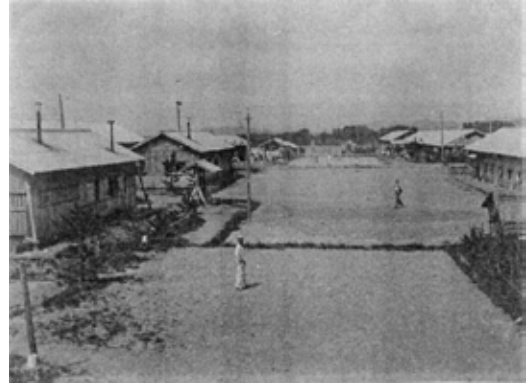


図1 青野原収容所内の様子

青島で捕虜になった兵士たちの中には少数ながらオーストリア＝ハンガリー、いわゆるハプスブルク帝国の兵士たちが含まれていました。彼らはハプスブルク帝国の東アジアの常駐艦「皇妃エリーザベト」号の乗組員でした。戦争が始まった時、日本とハプスブルク帝国の間に直接的な軍事的利害の対立はなく、両国の外交当局者たちは戦争状態に入ることを回避しようと考えました。その時、ハプスブルク帝国の東アジアにおける最大の軍事的プレゼンスである「皇妃エリーザベト」号の処遇が問題になりました。この時「皇妃エリーザベト」号は同盟国ドイツの青島港に停泊していました。両国外交当局は「皇妃エリーザベト」号を中立化することで戦争状態に入ることを避けることができると考えました。実際「皇妃エリーザベト」号は武装解除されて、乗組員たちは武器を持たずに当時ハプスブルク帝国の租界があつた天津に向かいました。ところがここで事態は急転します。天津には本国の軍当局から「ドイツ軍とともに戦うべし」という指令が届き、天津入りした「皇妃エリーザベト」号の乗組員は踵を返して青島に向かいました。同時に在東京のハプスブルク帝国外交使節は離日し、この外交関係の断絶により日本政府は両国が開戦状態に入ったと認識しました。

青島に戻ったハプスブルク帝国の兵士たちはドイツ軍とともに青島防衛のために戦い、その多くが捕虜としてドイツ軍兵士とともに日本国内に移送されました。その多くが姫路で収容されていたため、姫路から移送された青野原にも220人余りのハプスブルク帝国捕虜が存在することになりました。ハプスブルク帝国は主要な言語だけでも11の言語が話されていた多民族国家でした。海軍の兵士は海に面したイタリア系や南スラブ系の人たちが多かったとはいえ、ほぼ帝国全体から集められており、捕虜たちの民族構成は帝国の民族構成を反映していました。100年前の加西に突然箱庭の多民族国家が出現したことになります。

またハプスブルク帝国は戦争の緒戦でロシアに敗れ、大量の捕虜がロシアで抑留されていました。その数は200万人に達するとも言われています。ロシアは物資の逼迫した戦時に大量の捕虜を抱え込むことになりました。そこでロシアは比較的信頼できるスラブ系捕虜をヨーロッパロシア部に収容し、ドイツ系、ハンガリー系の捕虜をシベリアに収容する方針を取りました。ともあれロシア全土にハプスブルク帝国捕虜を収容する収容所があたかも群島のように連なることになりました。青野原収容所はこの協商諸国側のハプスブルク帝国捕虜収容所群島の東端を形成していました。1918（大正7）年4月のこと、それよりも2年前にロシアの収容所を脱走したハプスブルク帝国捕虜兵が逃亡生活に疲れて奉天の日本の警察に保護を求めるということがありました。この脱走捕虜兵は結局日本国内に護送され、青野原に収容されることになりました。220余名の背後にその一万倍の世界があることを端無くも示す事件でした。

日本全土で収容されていた捕虜は4,700名を少し下回る数でしたが、300名ほどのハプスブルク帝国捕虜を

除けばドイツ帝国の捕虜たちでした。青野原で見ても半数以上の280名ほどの捕虜がドイツ帝国の兵士でした。そのうちの一人ケルステンは青島でも日記をつけていましたが、青野原の生活も詳しく記録していました。青野原収容所は第二次世界大戦以後ほとんど忘れられた存在でした。その存在に光が当てられるに至ったのは、何よりもケルステンの手記を発見し、小野市の市史編纂グループに提供したディルク・ファン・デア・ラーン氏の存在があったからです。板東の収容所に収容されていた捕虜を父に持つラーン氏は世界を駆け巡って日本に収容されていたドイツ人捕虜に関する資料を集め、その過程で2009年に亡くられますが、第一次世界大戦下日本の捕虜収容所研究の進展に果たした功績は計り知れないものがあります。

私たち神戸大学文学部史学講座のスタッフはケルステンの手記の翻訳に当たりましたが、姫路師範や小野中学とのサッカーの試合に一喜一憂し、豚を飼うことに情熱を注ぐケルステンの捕虜生活はもう一つ実感の薄いものでした。しかし翻訳作業が終わった段階で現地調査をしたときに、その時民家の納屋として使われてなお現存していた旧収容棟で「青野原俘虜収容所新築工事」の棟札を「発見」した私たちは、ケルステンが描く青野原収容所の世界の存在を確信するにいたりしました。

私たち神戸大学史学講座のスタッフはその後も小野市や加西市と協力して収容所関係資料の収集に努め、捕虜たちが展示即売した煙草盆や俘虜たちが遊んだビリヤード台などが地元の人たちから提供されるにことになりました。そこで私たちは小野市や加西市と協力しながら、展示会などの形で青野原収容所研究を広く社会に発信することに努めました。2008年には捕虜たちの出身国の一つオーストリアの首都ウィーンにある国立文書館で展示会を開き、同時に神戸大学交響楽団が捕虜が開いた演奏会を再現するというも行いました。その過程で、ドイツ在住のディーター・リンケ氏から、青野原で収容されていた捕虜の遺族から入手した大量の写真が提供されることになりました。驚くべきことには、それらの写真はケルステンの手記で書かれていた収容所の世界を目に見える形で示していました。豚を飼育する捕虜たちとそれを警備する衛兵たち、豚の世話をしたあとで豚小屋の裏手にある池で泳ぐ捕虜たち、サッカーをする捕虜と地元の人たち、それを見る人たち。しかしそこに映し出されたのは捕虜たちの生活だけではありませんでした。捕虜たちが遠足で通過した街並みや、訪れた名所は当時の加西市、小野市、加東市など青野原周辺地域の様子を残した貴重な資料になりました。青野原収容所の調査研究の拠点となった加西市立図書館のあるアスティアかさい近辺の「当時」もまた写真の中に残っていました。

この冊子で私たちは青野原収容所の調査研究の現状を踏まえて、「加西に捕虜がいた頃」の捕虜たちの生活と「その頃の」加西と収容所から見える「世界」とを再現したいと思っています。お楽しみください。

大津留 厚

(神戸大学大学院人文学研究科)



地図1 青森県の位置



地図2 青森収容所の位置

目 次

1. 捕虜たちの故国	4
2. 第一次世界大戦の勃発	5
3. 日本における捕虜収容所	10
4. 青野原俘虜収容所の世界	14
5. 地域社会との交流	30
6. 100 年前の風景	40
7. 捕虜の帰国と青野原収容所の閉鎖	48
姫路・青野原俘虜収容所略年表	49
これまでの活動記録（神戸大学地域連携センター）	50
掲載地図・図版一覧	52

1. 捕虜たちの故国

青野原収容所に収容された捕虜たちの故国は、ドイツとオーストリア＝ハンガリーという中央ヨーロッパの二つの大国でした。

①ドイツ帝国

ドイツは長らく、神聖ローマ帝国やドイツ連邦として結びついた諸州の緩やかな連合体でした。その中で、プロイセン王国が勢力を拡大していき、普墺戦争と普仏戦争という二つの戦争を経て、1871年にドイツ統一を果たしました。その領域には、現在のフランス、デンマーク、ポーランド、リトアニアの一部も含まれていました。このプロイセン王国によるドイツ統一に尽力したのが、プロイセン王国首相であり、ドイツ帝国首相となったオットー・フォン・ビスマルクでした。彼は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世（位1871-1888年）のもと国内の近代化を推し進め、各国のドイツに対する警戒心を解くために、対外的には協調路線をとります。

しかし、第三代ドイツ皇帝となったヴィルヘルム2世（位1888-1918）はビスマルクを排し、積極的な対外膨張政策に転じます。極東における拠点となる膠州湾を租借地とし、植民都市青島（チンタオ）の開発が行われました。ヴィルヘルムの対外政策は、イギリス、フランス、ロシアといった協商国との対立を招いていったのです。

②オーストリア＝ハンガリー帝国

帝国の領域は、現在のオーストリアとハンガリーだけではなく、チェコやスロヴァキア、そしてクロアチア、スロヴェニア、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナといった旧ユーゴスラビア地域、さらにイタリアやポーランドの一部に及んでいました。ハプスブルク家のルドルフ1世（位1273-1291年）がオーストリアを手に入れて以来、同家の君主たちはハプスブルク帝国とも呼ばれる、多様な民族が住む帝国を築き上げてきました。

この帝国は1867年以降、オーストリアとハンガリーがそれぞれ独自に政府を持ちながらも、皇帝フランツ＝ヨーゼフ（位1848-1916年）を共通の君主とする独特な国家体制（アウスグライヒ体制）をとっていました。ただ、外交、軍事、財政は共通業務とされ、それぞれを所管する共通大臣が置かれました。そして帝国全土から徴兵された共通軍は、帝国内の民族の多様さを反映していました。

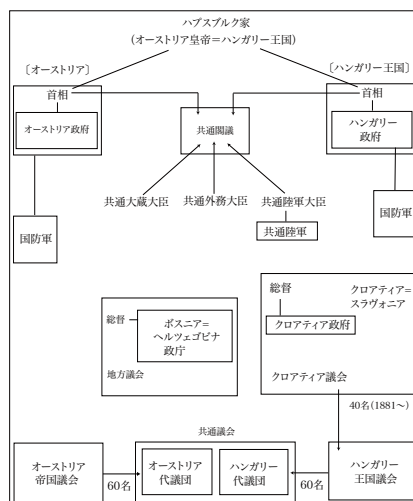
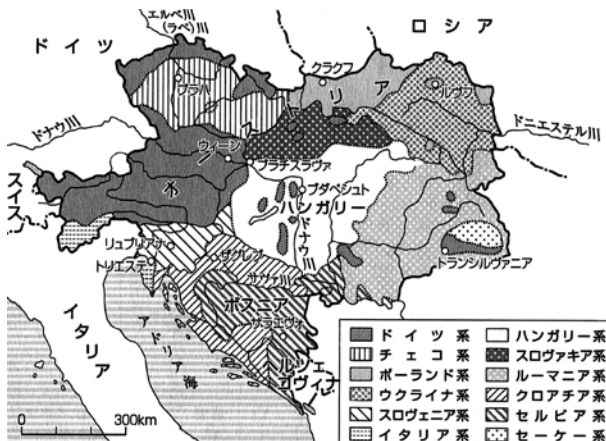


図2 アウスグライヒ体制



地図3 言語によるオーストリア＝ハンガリーの民族分布図



地図4 第一次世界大戦前夜のヨーロッパ

2. 第一次世界大戦の勃発

当時のバルカン情勢

ロシア帝国とオスマン帝国が戦った露土戦争（1877-1878年）によって、バルカン半島におけるオスマン帝国の衰退は決定的となりました。この紛争を調停するために各国代表が集まったベルリン会議において、バルカン諸国の中でセルビア、モンテネグロ、ルーマニアの独立が正式に承認され、オーストリア＝ハンガリーはボスニア＝ヘルツェゴヴィナの施政権を手に入れました。

オーストリア＝ハンガリー共通外相アロイス・レクサ・エーレンタールは、ロシアとの協調関係を保ちつつ、バルカン半島における自国の権益を確保することを目指していました。オーストリア＝ハンガリーはオスマン帝国でおきた青年トルコ革命（1908年7月）の混乱に乗じて、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナの併合（1908年10月）を宣言します。これに強く反発したのがセルビアでした。1903年の政変で即位したセルビア国王ペータル1世（位1903-1918年）は国内の急進派と結び付き、オーストリア＝ハンガリーと対立し、ロシアと接近していました。また、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナにはセルビア人が多数住んでおり、オーストリア＝ハンガリーのその他の地域にもセルビア人が存在していました。セルビア民族主義者たちは、こうしたセルビア国外の同胞を解放し、すべてのセルビア人を結集した国家の創設という目標を掲げていました。

二度のバルカン戦争（第一次1912年10月-1913年5月、第二次1913年6月-8月）によって、オスマン帝国はバルカン半島から排除され、バルカン諸国の中でセルビアが勢力を拡大し、その領土と人口はかつての二倍となりました。オーストリア＝ハンガリーにとって、セルビア民族主義が大きな脅威となったのです。

サラエヴォ事件

1914年6月28日11時30分頃、ボスニアの首都サラエヴォにてオーストリア＝ハンガリー皇太子夫妻がセルビア人学生に暗殺されました。近郊で行われた軍事演習の視察を終え、その日の朝、皇太子フランツ＝フェルディナントと妻ゾフィーがサラエヴォの駅に到着しました。駅から、一行は車に分乗し、市庁舎に向かいます。この途中、車列に向かって手榴弾が投げ込まれる爆破事件が発生します。幸い皇太子夫妻に怪我はなく、2人は無事に市庁舎に到着しました。そこで市長の出迎えを受けた後、フェルディナントは予定を変更し、爆破による怪我人を見舞うために病院に立ち寄ることになったと言われています。そして皇太子夫妻が乗る車が市庁舎を出て数分、ちょうどラテン橋を渡ろうとしたとき、ガヴリロ・プリンツィプが手にしたピストルで皇太子夫妻を撃ったのです。プリンツィプの放った銃弾は、それぞれフランツ＝フェルディナントの首とゾフィーの腹部に命中し、2人とも搬送先の総督府官邸で息を引き取りました。



図3 1910年のサラエヴォ



図4 フランツ＝フェルディナント夫妻

この写真は、サラエヴォ市庁舎を出発する皇太子夫妻の様子を写したものです。このわずか5分後、2人は暗殺されました。

この暗殺を実行したグループは、通称「黒い手」と呼ばれる秘密組織のメンバーで、セルビア民族主義者でした。1908年の併合以来、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナではセルビア人による民族統一運動が高まりつつありました。ボスニア出身でまだ学生だったプリンツィプもそのような運動に参加していました。フランツ＝フェルディナントのボスニア訪問を聞いたプリンツィプは暗殺計画を練り上げ、そのための仲間を募ります。さらに皇太子暗殺に必要な武器の調達や輸送には、セルビアの軍や役人が密かに関与していました。手榴弾による暗殺の失敗など、暗殺は事前の計画通りに行きませんでした、プリンツィプたちは皇太子の暗殺に成功しました。



図5 フランツ＝フェルディナントが着用していた制服



図6 皇太子夫妻が乗っていた車

これらは現在、ウィーンの軍事史博物館で展示されています。

皇太子死去のニュースは、すぐさまオーストリア＝ハンガリー中に伝えられました。1914年6月29日発行の『ウィーン新聞』は、「予期せぬ残酷な不幸が皇帝家、帝国、国民を襲い、皆に大変なショックを与えた。フランツ＝フェルディナント大公殿下とゾフィー大公妃殿下が本日（28日）午前、サラエヴォにて卑劣な銃弾の犠牲となられた」と伝えています。皇帝フランツ＝ヨーゼフはバート・イシュルでこの悲報に接し、翌日朝6時にはウィーンへ発ちました。また同紙は、事件当日のウィーン市内の様子を次のように報じています。「この恐ろしき犯行に関するニュースは人々の間で瞬く間に広まったが、不確かな噂ばかりで、誰も正確なことを知らなかった。[中略] 役所や新聞社には、問い合わせの電話が殺到し、カフェや酒場はこの恐ろしい話題で持ちきりだった。これらの場所や通りでは、見知らぬ者同士が集まって、興奮しながら議論し合う姿が見られた。」もちろん、皇太子死去のニュースは外国にも瞬く間に広まり、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世もドイツ北部の軍港キールで第一報を受けました。

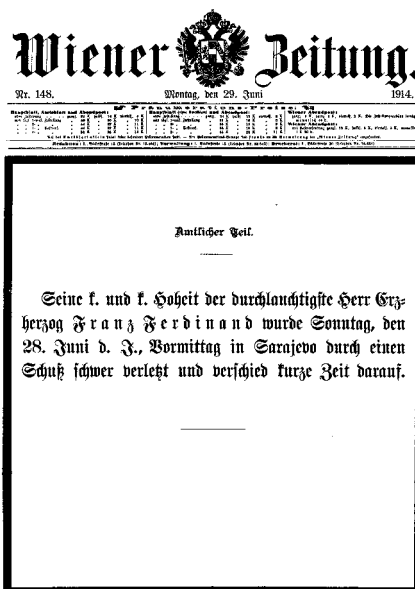


図7 『ウィーン新聞』（1914年6月29日発行）

最後通牒

オーストリア＝ハンガリー政府は、皇太子暗殺事件を重大な挑発と受け止めました。この事件にセルビア政府も関与しており、セルビア民族主義者の活動がオーストリア＝ハンガリー国内の南スラブ地域を脅かしていると考えていました。そこで、オーストリア＝ハンガリー政府は、ドイツから支援の確約を得て、国際社会に対してセルビアに責任があることを表明し、セルビア政府に対してさまざまな要求を突きつける「最後通牒」を送付しました。

1914年7月23日にセルビア政府に対して渡された「最後通牒」は、皇太子の暗殺事件に至るまでの経過やその後の対応を挙げて、セルビア政府の不作為を糾弾しています。さらにセルビア政府に対して突きつけた要求は、以下の10項目でした。

1. 人々がオーストリア＝ハンガリーを嫌悪し、軽蔑するよう扇動したり、我らの領土の不可侵性に反対するような、あらゆる出版物を禁止すること。
2. ナーロードナ・オドブラナ（セルビア国家主義組織）を即時解散させ、そのプロパガンダの手段となっているすべてを没収すること、さらにオーストリア＝ハンガリーに敵対するプロパガンダに関わっている、セルビア国内に存在するその他の団体や組織に対しても同様の措置を講じること。
3. 教師や教材といった、オーストリア＝ハンガリーに敵対するプロパガンダにつながる、もしくはつながる恐れのあるすべてのものをセルビアの公的教育から直ちに排除すること。
4. オーストリア＝ハンガリーに敵対するプロパガンダに関わり、その名前の公表をオーストリア＝ハンガリーが一任されているすべての将校と役人を軍と行政全般から一掃すること。
5. オーストリア＝ハンガリーの不可侵性を脅かすような破壊活動を抑えるために、セルビア国内においてオーストリア＝ハンガリー政府の機関が協力するのを認めること。
6. 6月28日の事件に関与し、セルビア領内にいる者に対する法廷尋問を開始し、その尋問にオーストリア＝ハンガリー政府が派遣する機関を参加させること。
7. 捜査の結果、事件に関与が疑われるヴォヤ（ヴォイスラヴ）・タンコシッチ少佐とミラン・チガノヴィッチと称する官吏を直ちに逮捕すること。
8. セルビア当局が関与する武器や爆発物の密輸入を阻止するために、有効な措置を講じること。
9. 国外におけるセルビア高官の目に余る発言に対して釈明をすること。彼らは公的な立場にあるにもかかわらず、6月28日の暗殺事件後にオーストリア＝ハンガリーに対して敵意を持って堂々と発言している。
10. 以上の点を踏まえた措置の実施をオーストリア＝ハンガリー政府に遅滞なく通知すること。

セルビア政府は、これらの要求の多くを受け入れましたが、オーストリア＝ハンガリー政府の機関がサラエヴォ事件共犯者の司法手続きに関与することだけは、重大な主権侵害だとして拒否しました。

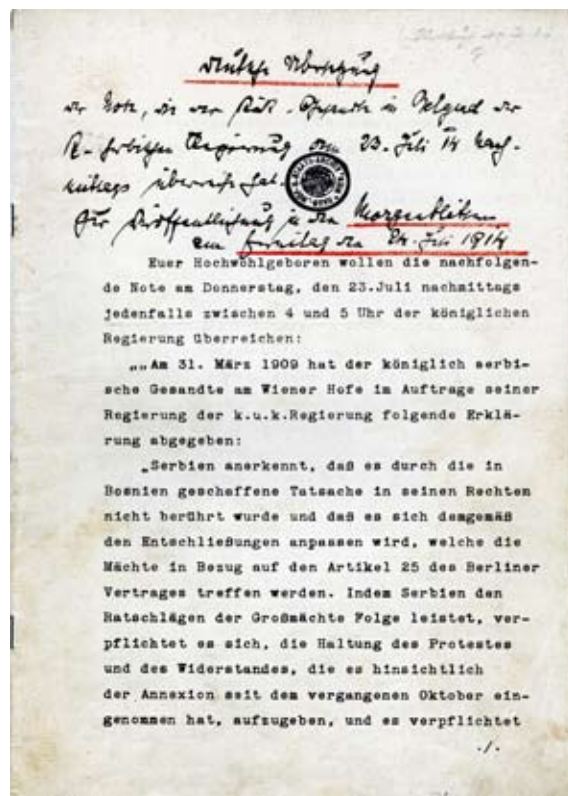


図8 セルビアに対する最後通牒

宣戦布告

オーストリア＝ハンガリー政府は、セルビアからの回答に満足せず、セルビアの首都ベオグラードに駐在していた大使ギースルを本国に召還し、1914年7月25日セルビアとの国交断絶に踏み切ります。そして7月27日、共通外相ベルヒルトは皇帝フランツ＝ヨーゼフに「宣戦布告書」の草稿とその認可を求める書簡を送付しました。

今月25日にオーストリア＝ハンガリー大使ギースル男爵に届いたセルビア政府の回答は巧みに書かれ、形式的には譲歩しているが、その内容には全く価値がありません。このことに鑑みて、もはや宣戦布告をして立場を鮮明にすることなく、三国協商側が対立を平和的に解決する道を模索しようとすることはあり得ないと判断しております。

また第4軍司令部からの報告によりますと、昨日セルビア軍のドナウ川汽船がテメシュ＝クビンで我が軍に砲撃してきたため、我が軍も反撃し、より大きな戦闘が発生したとのことです。これをもって事実上戦端は開かれており、それゆえ国際法上の観点より戦時においてのみ許される活動の自由を軍に与えることが望ましいと思われます。

(「宣戦布告書」草稿より)

ベルヒルトはこの書簡の中で、開戦がやむを得ない結論であることとテメシュ＝クビン（現セルビア・コピン）においてすでに戦闘がおきていることについて言及しています。しかしテメシュ＝クビンでの戦闘が誤報であることが、遅くとも「宣戦布告書」を送付する前に判明していましたので、実際にセルビアに送付された「宣戦布告書」では、このことに言及した箇所が削除されました。この「宣戦布告書」の修正は皇帝に知らされることはありませんでした。この日、フランツ＝ヨーゼフはバート・イシュルにて宣戦布告書に署名をしました。



図9 セルビアに対する宣戦布告書（草稿）

草稿

ベオグラード、場合によってはクラグイエヴァツのセルビア王国外務省への電報

ウィーン、1914年7月28日

1914年7月23日に駐セルビア・オーストリア＝ハンガリー大使がセルビア王国政府に手渡した通告に対して、同国政府は満足のいく回答を行わなかった。したがって、オーストリア＝ハンガリーは自らの権利と利益を守らざるをえず、そのために軍事力行使せざるをえなくなった。七かも、セルビア軍はテメシュ＝クビン付近でオーストリア＝ハンガリー軍に対して攻撃を仕掛けてきた。それゆえに、オーストリア＝ハンガリーはその時点でセルビアと交戦状態に入ったと考えるものである。

オーストリア＝ハンガリー外務大臣ベルヒルト伯

右側に「閲覧済み」と書かれたフランツ＝ヨーゼフの署名が見られる。

参戦の連鎖

オーストリア＝ハンガリーのセルビアに対する宣戦布告を受けて、セルビアを支持するロシアが総動員令を発令し、オーストリア＝ハンガリーと戦争状態になります。これに対して、オーストリア＝ハンガリーと同盟関係にあったドイツがロシア、次いでフランスに対して宣戦を布告しました。フランスやロシアと協商関係にあったイギリスは当初参戦を躊躇していましたが、ドイツがヨーロッパにおける覇権を握ることを恐れ、ドイツの中立国ベルギー侵攻を確認した8月4日に参戦しました。こうして、バルカン半島における二国間の対立がヨーロッパ諸国を巻き込んだ大戦となっていきます。

1914 年	6 月 28 日	フェルディナント皇太子夫妻がサラエヴォで暗殺される
	7 月 23 日	皇帝フランツ＝ヨーゼフがセルビアへの最後通牒に署名する
	7 月 28 日	オーストリア＝ハンガリーがセルビアに対して宣戦布告する
	7 月 31 日	ロシアが総動員令を発令する
	8 月 2 日	ドイツがロシアに対して宣戦布告する
	8 月 3 日	ドイツがフランスに対して宣戦布告する
	8 月 4 日	ドイツのベルギー侵攻を受けて、イギリスがドイツに対して宣戦布告する

「世界大戦」

その後 1915 年 5 月、開戦時には中立だったイタリアがオーストリア＝ハンガリーに対して宣戦布告をし、1917 年 4 月にはアメリカが参戦しました。主要参戦国の植民地を含めれば、戦争の影響は世界各地に及びました。そして戦争の犠牲者もかつてないほどの数に上りました。第一次世界大戦におけるドイツとオーストリア＝ハンガリーの戦死者数は、300 万人以上とも言われ、そのほか民間人にも多数の犠牲者が出ました。大量に動員された兵員数や、格段に性能が向上した兵器の大量投入が未曾有の戦禍をもたらしたのです。

青島（チンタオ）での戦闘

ヨーロッパ諸国が次々と参戦していく中で、日本でも参戦の是非が検討されました。参戦に慎重な意見もあったものの、この機に日本の権益拡大を目指そうとする参戦論が高まりました。参戦を支持する元老井上馨は、第 2 次大隈重信内閣に送った意見書に「今回欧州の大禍乱は、日本国運の発展に対する大正新時代の天佑にして、日本国は直ちに挙国一致の団結を以て、此の天佑を享受せざるべからず」と記しています。イギリスの参戦を受けて、大隈内閣は 1914（大正 3）年 8 月 7 日の閣議で参戦の方針を決定しました。この方針に従って、8 月 15 日ドイツに対する最後通牒が出され、8 月 23 日には日本とドイツは戦争状態となりました。日本は、アジアにおけるドイツの拠点である中国・青島（チンタオ）と南洋諸島に軍を派遣しました。

青島に派遣された日本軍の数は 5 万 1,700 人で、そこにイギリス軍 1,390 人が加わり、青島を包囲していました。対するドイツ青島駐留軍は 5,000 人で、司令官ヴァルデック総督も当初から敗戦を覚悟していました。10 月 31 日、包囲していた日本軍が青島への総攻撃を開始したとき、そこにオーストリア＝ハンガリー海軍の巡洋艦「皇妃エリーザベト」号も駐留していました。その結果、「皇妃エリーザベト」号の乗員もドイツ軍とともに日本軍と戦うことになったのです。戦力で圧倒的に劣っていたドイツとオーストリア＝ハンガリーの青島駐留軍は、11 月 7 日に降伏し、その時まで「皇妃エリーザベト」号も砲弾を撃ち尽くし自沈していました。

この青島の戦闘で戦死したドイツとオーストリア＝ハンガリー兵は 210 人で、捕虜となったのは 4,689 人でした。そして、捕虜たちは日本へと移送されたのです。

3. 日本における捕虜収容所

捕虜の取り扱い

第一次世界大戦時に捕虜となった人数は、世界中で800～900万人と言われています。彼ら捕虜に対する国際的な取り決めが明文化されたのは、1907（明治40）年オランダのハーグで行なわれた第二回万国平和会議で調印された「陸戦ノ法規慣習に関する規則」（「ハーグ陸戦条規」）が初めてで、日本はこの条規を1911（明治44）年に批准しています。この規則の中で、第2章（第4条～第20条）が捕虜（当時は「俘虜」と表記されていた）に関する規定になっており、冒頭（第4条）で「俘虜ハ、人道ヲ以テ取扱ハルヘシ」と謳われていました。

日本軍に捕えられた捕虜は、数の上ではヨーロッパ戦線における捕虜よりもはるかに少なかったのですが、日本政府はこの規則に従って捕虜を取り扱う必要がありました。まず日露戦争時の「俘虜取扱規則」を改定し、「俘虜取扱細則」と「俘虜処罰法」を新たに制定することで、捕虜に関する法が整備されました。そして、日本政府は1914（大正3）年9月14日に陸軍大臣の指揮下に「俘虜情報局」を設置し、青島の戦いで捕虜となったドイツとオーストリア＝ハンガリーの捕虜兵たちを全国各所に設けられた収容所に分けて収容することにしました。

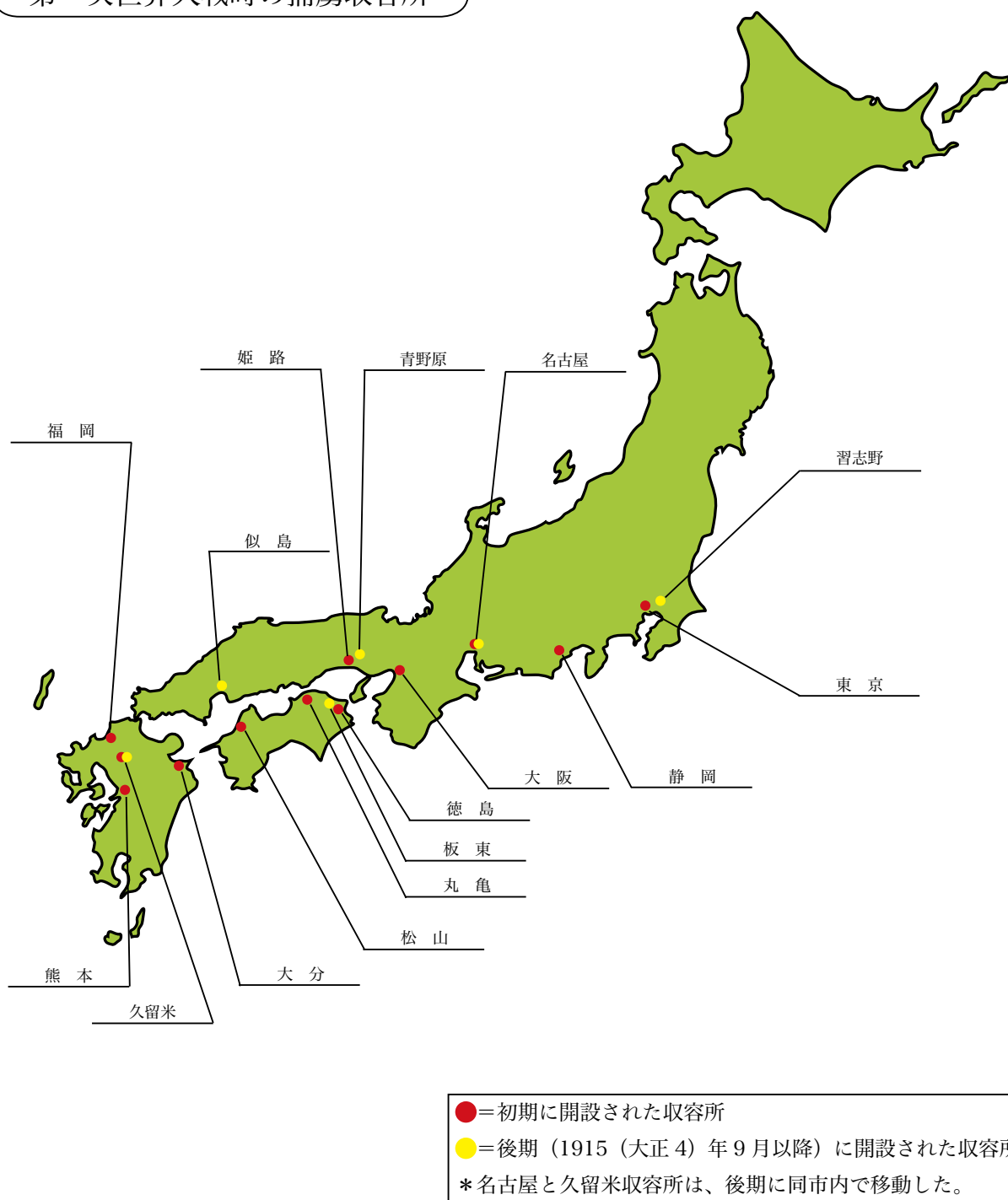
各地の捕虜収容所

1914（大正3）年11月14日に青島を陥した捕虜たちは、17日に門司港に到着し、翌日宇品港に入りました。ここで、捕虜たちが収容される場所ごとに分けられ、各地へと移送されて行きました。当初捕虜収容所は、全国12か所にありました。

東 京	1914（大正3）年11月～1915（大正4）年9月
静 岡	1914（大正3）年11月～1918（大正7）年8月
名古屋	1914（大正3）年11月～1915（大正4）年9月
大 阪	1914（大正3）年11月～1917（大正6）年2月
姫 路	1914（大正3）年11月～1915（大正4）年9月
徳 島	1914（大正3）年12月～1917（大正6）年4月
丸 亀	1914（大正3）年11月～1917（大正6）年4月
松 山	1914（大正3）年11月～1917（大正6）年4月
福 岡	1914（大正3）年11月～1918（大正7）年4月
久留米	1914（大正3）年11月～1915（大正4）年3月
大 分	1914（大正3）年11月～1918（大正7）年8月
熊 本	1914（大正3）年11月～1915（大正4）年6月

これら初期の収容所は、寺院や公的施設、もしくは民間の建物を借用していました。その後1915（大正4）年9月以降、本格的な専用施設を備えた収容所が開設されていき、既存の収容所の統合や移転が進められていきました。最終的に、日本の捕虜収容所は習志野（東京、福岡、大分、静岡から移転）、名古屋（市内から移転）、青野原（姫路から移転）、板東（徳島、丸亀、松山から移転）、似島^{にのしま}（大阪から移転）、久留米（市内と熊本から移転）という6か所に集約されました。これら6つの収容所は、陸軍の軍用地内に開設され、ほぼすべての捕虜が解放される1920（大正9）年1月頃まで使用されていました。

第一次世界大戦時の捕虜収容所



地図5 第一次世界大戦時の捕虜収容所

姫路収容所

宇品から鉄道で移送されてきた捕虜は、1914（大正3）年11月20日に姫路に到着しました。姫路捕虜収容所では、船場本徳寺、景福寺、妙行寺の3か所が収容所として使われました。このとき、本徳寺にはドイツ兵、景福寺にはオーストリア＝ハンガリー兵がそれぞれ150名ほど、妙行寺には将校など10名余りが収容されました。併せて300人以上の捕虜が、1915（大正4）年9月までの10か月間姫路で生活をしていました。なお、本徳寺と景福寺は日露戦争時のロシア兵捕虜も収容していました。

捕虜たちは姫路収容所における生活にも慣れ、時間をもてあますようになり、中には日本語を勉強する者もいました。12月に入ると、遠足も許可されるようになり、捕虜たちは姫路城天守閣にも登閣しています。収容所の閉鎖までの間に、このような外出が十数回許可されてました。また収容所内に酒保が設けられ、アルコール類などが販売されていました。これらを購入するための現金は、主にドイツの企業や在邦外国人からの寄贈金によって賄われていました。



図10 姫路収容所

収容所の1つ船場本徳寺には、ライン河畔の古城を模したモニュメント（噴水）が今も残されています。これは、捕虜兵ヴァルター・ネヴィガーが製作したものと考えられています。



図11 捕虜が製作したモニュメント（噴水）



図12 製作者と思われるネヴィガー

青野原収容所の建設

1915（大正4）年になり、戦争が長期化するにつれて、日本政府は捕虜の待遇改善のために本格的な収容所を建設し始めます。前述の通り、全国で捕虜収容所の統廃合が行われ、収容所は1917（大正6）年までに習志野、青野原、久留米、名古屋、似島、板東という6か所に集約されました。捕虜の移動に際しては、階級や国籍も考慮されていました。3か所の寺院を収容所として使っていた姫路収容所では、新たな収容所の建設が決定され、陸軍の演習場がある青野原台地に収容所を開設することになりました。これが青野原俘虜収容所です。

青野原俘虜収容所は1915（大正4）年5月に建設が決定し、6月から施設の建設が始まりました。収容所施設の建設工事は競争入札の結果、五百旗頭喜八が4万1,000円で落札しました。その後6月21日に契約が結ばれ、収容所施設は青野原演習場の北端にある高岡廠舎の南側に建設されました。



図13 青野原収容所の棟札

青野原の現地調査で偶然に発見されたこの棟札には、収容所新築にあたって設計者や工場主任官を務めた人物の名前に加え、工事を請け負った五百旗頭喜八の名前も見られます。この棟札によれば、起工日は6月25日で、竣工日は9月13日となっています。

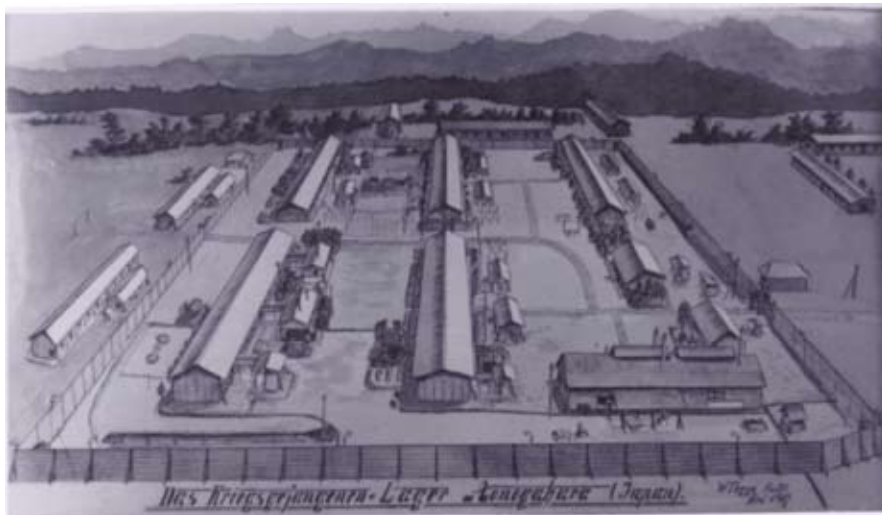


図14 捕虜が描いた青野原収容所（W. Tegge 作）

捕虜の移動

9月20日に姫路収容所から捕虜が移送されてきました。捕虜たちは、まず特別列車で姫路から大門口駅（現在のJR加古川線青野ヶ原駅）に到着し、そこから徒歩で青野原収容所に移動しました。その様子を写した写真（現在の小野市「復井町」交差点付近）からは、移動する捕虜の隊列を多くの見物人が取り囲んでいる様子が分かります。



図15 青野原収容所へ移動する捕虜の隊列

写真下部には、「大正四年九月廿日獨逸俘虜青野原収容所□向フ（大門口附近）」と書かれています。

4. 青野原俘虜収容所の世界

捕虜たちが青野原に移送されてきたのは1915（大正4）年9月で、第一次世界大戦の停戦（1918年10月）と講和条約の調印（1919年6月と9月）を過ぎてなお、最後まで収容所に残されていた捕虜が帰国の途についたのは1920（大正9）年1月のことでした。つまり、ドイツとオーストリア＝ハンガリー兵たちの中には、最長で4年4か月に及ぶ捕虜生活を青野原で過ごした者もいたことになります。彼らの生活は、どのようなものだったのでしょうか。ここでは、実際に青野原収容所で捕虜となっていたヘルマン・ケルステン（ドイツ海軍二等砲兵）が記した日記（以下、「ケルステン日記」）や、同じく捕虜であったハインリヒ・ハンクシュタイン（総督府無線通信士）が遺した写真などから、青野原収容所の世界、そして捕虜たちの日常生活を再現していきます。

収容所の様子

「ケルステン日記」には、青野原収容所について、以下のような記述があります。

約70ヘクタールに及ぶ土地が演習場のために造成され、その道路に面した外縁に日露戦争で捕えられたロシア兵捕虜を収容する6つのバラックが建設された。それらは柵で囲われることもなく海拔100メートルに位置していた。これらのバラックはその後、姫路に駐屯している第2歩兵連隊と騎兵隊の2つの部隊が演習する際の宿舎として使われていた。馬小屋は存在せず、馬は林の中に立っていた。古いバラックの真ん中に、1915年に新しいバラックが建設された。これは照明で照らされた有刺鉄線付きの板垣を持ち、200平方メートル以上の広さを誇るものであった。今やここに全部で455人の捕虜が収容されていた。入り口を2つ備えた2棟式のバラックが2組あって、1組の1つの棟につき120人が収容されていた。さらに事務棟バラックには衛生室があって、12人の将校が収容されており、そのほとんどはオーストリアの巡洋艦「エリーザベト」出身であった。2つのバラックに寝起きしている453人の半数もオーストリア人で巡洋艦「エリーザベト」出身だった。収容所から300メートルほど離れている小邑青野〔原〕は、最も近い鉄道駅まで5キロメートルあって、そこから姫路と神戸を結ぶ本線まではまた30キロメートル離れていた。

（「ケルステン日記」〔出典『AONOGAHARA 捕虜兵の世界』〕、〔〕内は編集で加筆、以下同様）

青野原俘虜収容所配置の復元について

次の資料をもとに青野原俘虜収容所配置の復元を試みました。

①同時代の収容所時代の資料

- ・「ケルステン日記」
- ・青野原俘虜収容所俯瞰図（スケッチ） W.Tegge 作（図14）
- ・そのほか捕虜が持ち帰った写真

②戦後の資料

- ・昭和21年の航空写真
- ・平成14、17年の加西市史建造物調査資料
- ・加西市地形図

まず、現在の加西市地形図に昭和21年の航空写真を同スケールで重ね、昭和21年時点の配置を確認しました。航空写真は屋根配置なので、市史建造物調査で得た実測データをもとに平面配置に変換しています。「ケルステン日記」に記載された建物名と面積と照らし合わせ、配置の建物を特定しつつ、さらに俯瞰図と俘虜が持ち帰った写真と配置図を比較しながら、昭和21年時点で失われた建物、収容所以後に建てられた建物を確認しました。同時に古写真の撮影位置を特定しながら、配置図の復元を行いました。

（尾瀬耕司＜神戸建築文化財研究所＞）

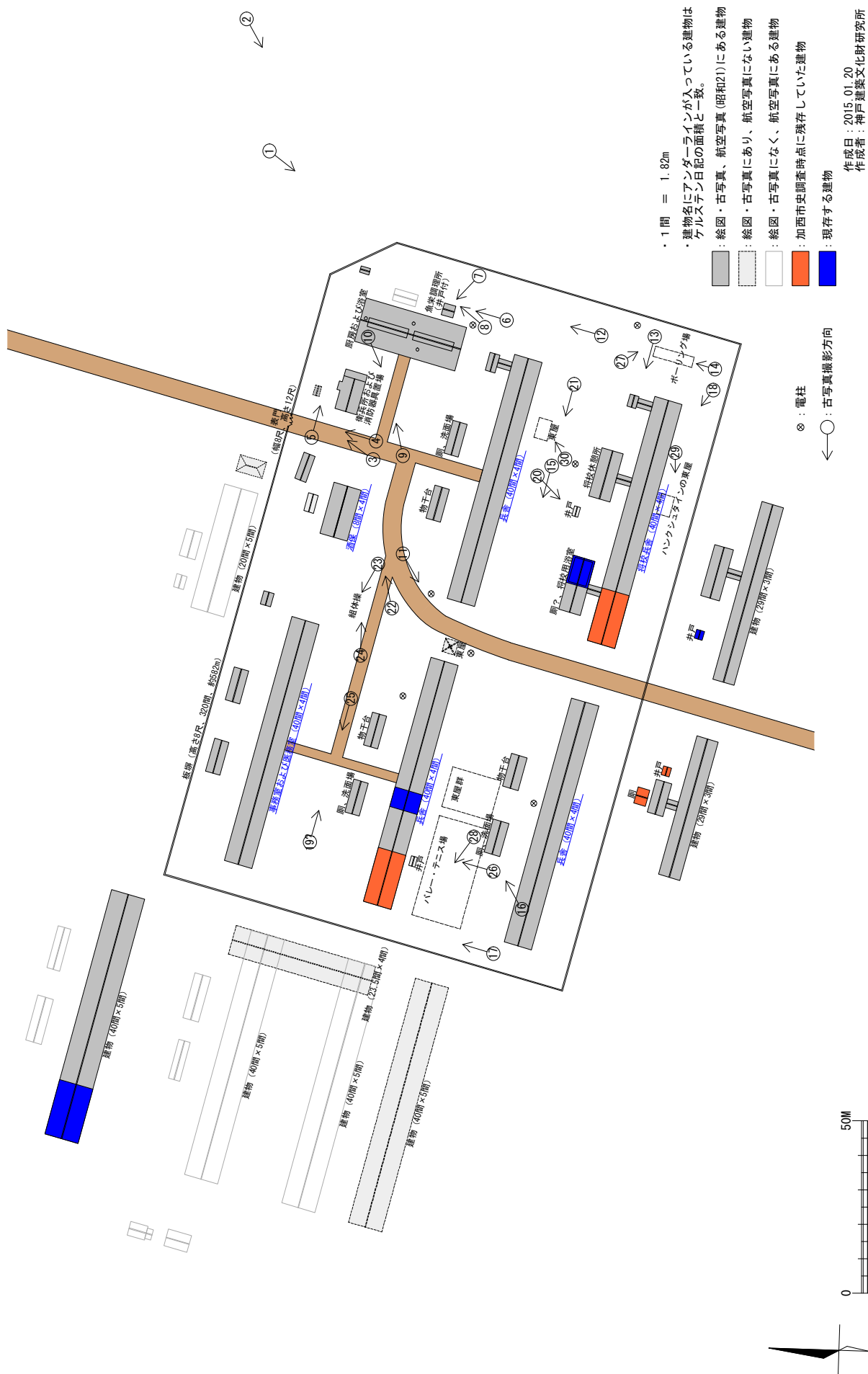


図 16 青野原收容所配置図



図 17 加西市地形図（現在）

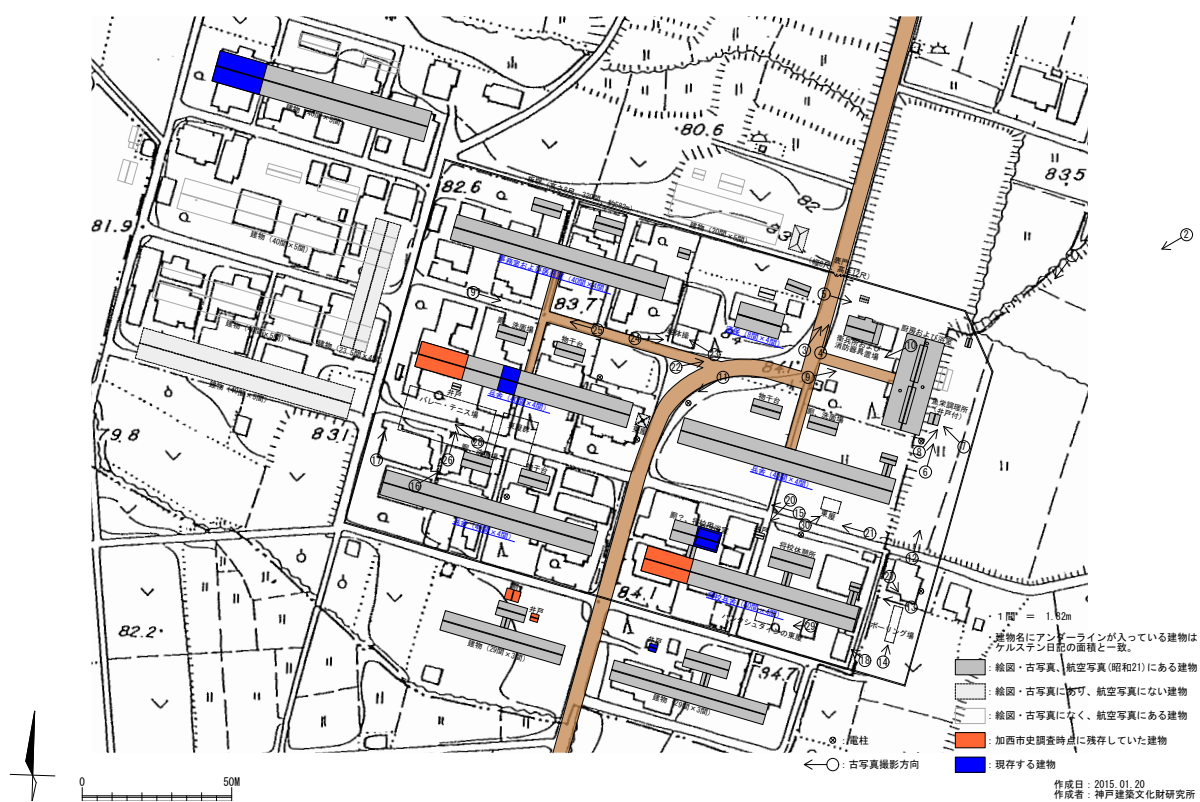


図 18 青野原収容所配置図を重ねた地形図



図 19 航空写真（昭和 21 年）

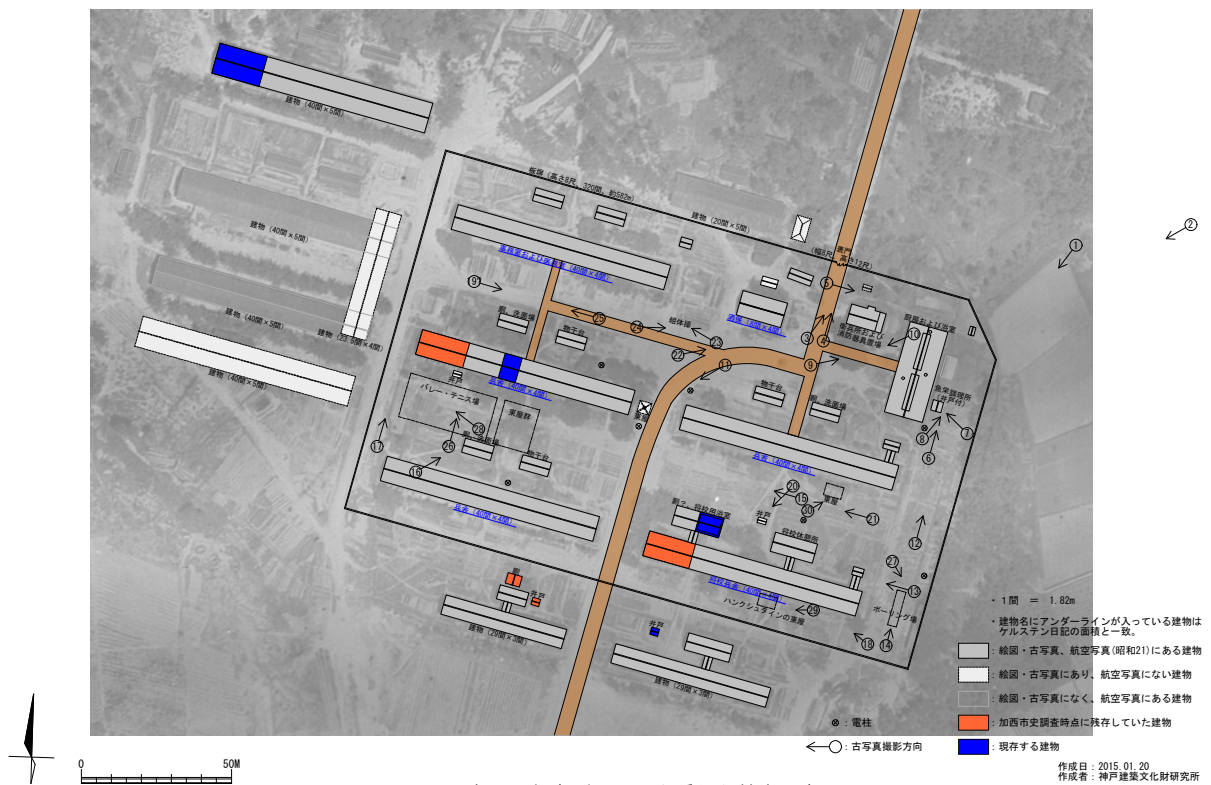


図 20 青野原収容所配置図を重ねた航空写真

青野原収容所の概要

青野原収容所には、捕虜たちが生活するために兵卒用宿舎（バラック）3棟、将校用宿舎1棟があり、さらに事務室及び医務室用のバラック、厨房および浴室として使用されたバラック、酒保がありました。ここに多い時で500名弱の捕虜が暮らしていました。彼らの監視には、約40名の衛士と約15名の警察官があたっていました。捕虜たちは、朝夕の点呼、所持品の検査、所持金の制限（30円まで）など、一定の制約下には置かれていましたが、それ以外では比較的自由が認められていました。



図 21 青野原収容所の外観①



図 22 青野原収容所の外観②



図 23 青野原収容所の表門③



図 24 青野原収容所内⑩



図 25 布団が干されたバラック⑯

左の写真では、バラックの屋根に布団を干す様子が見られます。これに関して、ケルステンも日記の中で、「1918年にインフルエンザが猛威を振るったときには、収容所の仲間にも患者が出た。朝から晩まで布団を干すことを精力的に真面目にやることで、我々は病気にはかかっても、死者は出さなかった」と書き残しています。当時世界中で流行したインフルエンザ（スペイン風邪）は、死者5,000万～1億人とも言われ、日本でも死者148万人に達していたと言われています。

*キャプション内の丸数字は収容所配置図の古写真番号を示しています。

バラック

兵卒用宿舎として使用されたバラックにはそれぞれ60人ほどが寝食を共にしていました。

我々はわら布団の上で寝たが、2つの板張り寝台の各々は27メートルだったので、一人当たり長さ2メートル、幅90センチの寝場所が割り当てられた。そこに60人もいては、もちろん講習会などは考えられなかった。我々のところには6つの机とそれに見合ったベンチと、さらに2つの丸い石炭ストーブもあった。

(「ケルステン日記」より)

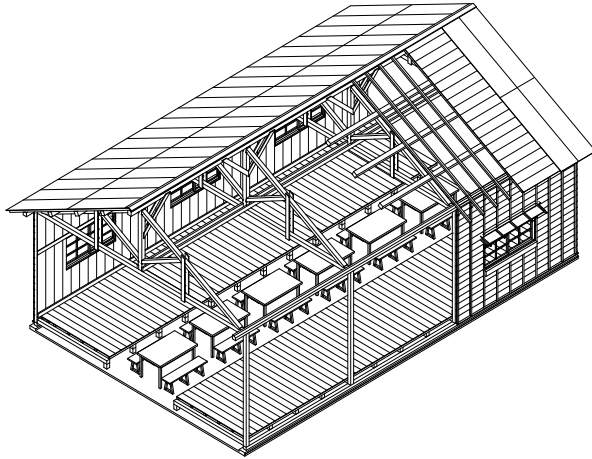


図26 兵卒用宿舎の復元図



図27 バラック内部

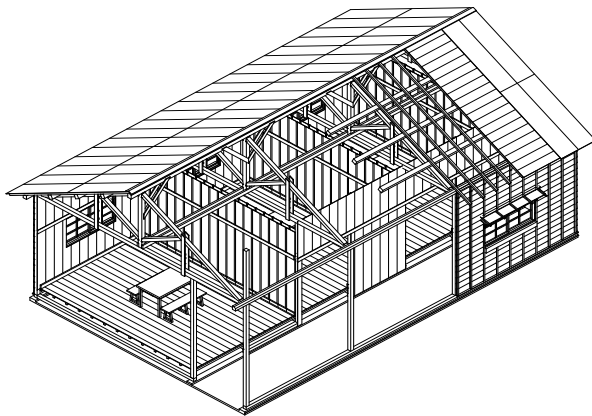


図28 将校用宿舎の復元図



図29 将校用宿舎の内部

酒保



図30 酒保

酒保では、アルコール類も提供されていましたが、左の写真にあるビールは、エンブレムから「アサヒビール」であることが確認できます。また、「平野水（三ツ矢サイダー）」もカウンターに並べられています。



図31 アサヒビール旧エンブレム
(写真提供:アサヒグループホールディングス)

娯楽

捕虜たちが収容所の生活で不満を持ち、問題を起こすことを避けるため、収容所当局は捕虜たちの生活に配慮していました。捕らわれの日常生活の中でも、捕虜たちが身体的にも精神的にも健康を維持できるように、さまざまな娯楽が提供されていました。バラックの中で、ビリヤードやカード遊びに興じる捕虜たちの姿が写真に残されています。当時使われていたビリヤード台が現存しています。写真やその台を見ると、球を落とすポケットのない台が使われていたようです。また、捕虜たちは新聞や本を取り寄せて読むことも許されていました。



図 32 バラック内でビリヤードをする捕虜たち

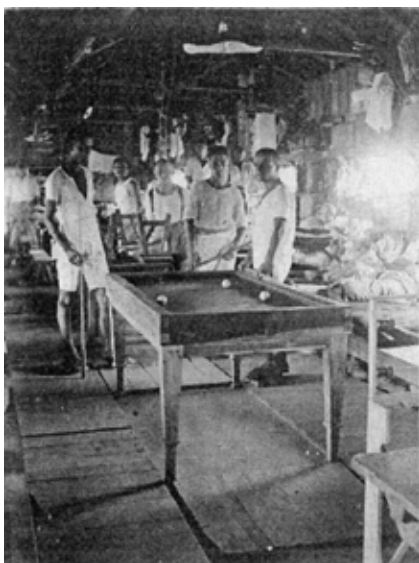


図 33 ビリヤードを楽しむ捕虜たち



図 34 当時使われていたビリヤード台

東屋

捕虜たちの中には、自分用の東屋^{あずまや}を建てるのが許された者もありました。それぞれ思い思いに花壇や菜園を作ったり、室内に装飾を施したりして、楽しんでいました。ハンクシュタインも自らの東屋を持っていて、そこで友人とビールを飲んでいました。ときにはこうした東屋に多くの仲間が集まり、「バンザイ」と呼ばれていた酒盛りをしていたようです。

豊かになるにつれ、東屋の中でいわゆるバンザイ [ドイツ語のフラーの意]、つまり酒盛りなのだが、それがしばしば行われた。それは静けさを破らない限り、夜まで許された。酒盛りに加わったのは、大抵は8～10人なのだが、彼らのビールがなくなると、酒保係が注文に応じて後からでも補充分を持ってきた。日本の醸造業者は激しい競争にさらされ、あらゆる手段で売り上げを伸ばそうとしていた。一度朝の点呼で1人欠けていたことがあった。彼が朝方までバンザイに参加していたことは知られていた。長いこと探した挙句に、彼がトイレで寝ているのが発見された。滑って床の裂け目に片足がはまってしまい、おそらく足を抜こうとしてそのまま眠ってしまったらしい。ほとんど膝まで糞まみれになっていた彼は、即座に拘禁室に入れられて、そのまま14日間過ごさなければならなかった。処罰されなければならないことはそんなに多くなく、ドイツ的な規律が5年以上にわたる捕虜生活でも確実に守られていた。

(「ケルステン日記」より)



図 35 ハンクシュタインの東屋



図 36 東屋に集まる捕虜たち

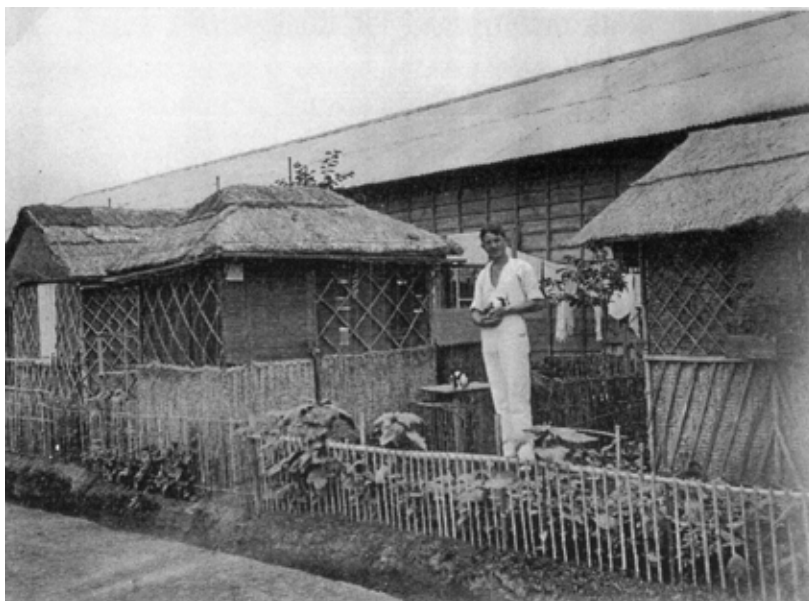


図 37 捕虜の東屋

スポーツ

野外で行うスポーツについても、多くの記述や写真が残されています。「ケルステン日記」には、テニスに関する記述が見られます。

特に2面のテニスコートの要望が強く、2つのバラック棟の間にあった空間がちょうどいい大きさだったので、そのために利用され、コートとして整えられた。たくさんいる捕虜たちの中には、自分の会社から定期的に給与を得ている予備役兵もあり、スポーツ用具や設備も日本人の酒保係を通じて手に入れることができた。コートの下に敷く荒砂利も、1時間の距離にある小川からわら袋を使って運んだが、手押し車は使えなかった。コンクリート製のローラーもあった。捕虜たちは、わずかな額と引き替えに、その施設の維持補修のために働いた。テニスコートはよく利用されたが、全員が利用できたわけではなく、自分でラケットや球や靴などの用具を買ったり借りたりできる者に限られていた。

(「ケルステン日記」より)



図 38 テニスをやる捕虜



図 39 テニスコート



図 40 ボーリングレーン



図 41 組み体操



図 42 棒高跳び

サッカー

屋外スポーツの中でも、サッカーは収容所南の板塀の外で楽しまれていました。「ケルステン日記」には、ケルステン自身も参加した姫路師範チームとの間で行われた3試合の様子が記されています。

3度ばかり我々は姫路から来た師範学校のチームと青野〔原〕でサッカーをした。6対0で我々が勝った後、敵方は雪辱を果たそうとした。その機会が来る前に、我々のチーム内でたちの悪い衝突があり、フォワードとゴールキーパーがもはや共にプレーできなくなったので、次は2対2になってしまった。日本人はひどく得意満面になったので、我々のチームのメンバーが変わったとも知らずに、自分たちが勝つに違いないと、第3試合を挑んできた。その間に我々のいさかいは解消していた。かわいそうな日本人、私は彼らのがっかりした顔を決して忘れない。我々は8対0で勝った。私のポジションはセンターハーフだった。

(「ケルステン日記」より)



図 43 姫路師範生との記念写真

写真所蔵者の父親が実際にこの試合に出場していたそうです。写真下に「8-0」というスコアと試合が行われた年月（大正8年5月）が書き添えられています。対戦スコアが「ケルステン日記」の第3試合目の記述と一致しています。この写真により日記にあった試合の年月が判明しました。

当時の写真には、サッカーをする捕虜たちばかりでなく、それを観戦する女性や子どもたちの姿も写し出されています。またサッカーの試合は、旧小野中学校との間でも行われています（大正8年7月13日）。こうした板塀の外で行われた活動を通じて、捕虜たちは近隣の地域社会と繋がっていたのです。



図 44 サッカーをする捕虜たち



図 45 サッカーを観戦する人々

演劇会や演奏会

スポーツ以外にも、捕虜たちの気晴らしとして演劇会や演奏会が催されていました。収容所には、捕虜たちによる楽団が編成され、楽器が揃えられました。また劇上演のために、観客席を備えた野外舞台も作られました。このような催しのチラシやプログラムもいくつか残されています。

ここ青野(原)では、我々は何度か「ヴァラエティの夕べ」と呼ぶ催しや演劇の上演も行った。とりわけ《壊れ甕》や《ミンナ・フォン・バルンヘルム》、それに一幕物である。バラックには最悪の場合ぎゅうぎゅう詰めで最高 250 人入ったが、その半数だけなら十分な広さだった。一度、名前は忘れたが、ある劇が上演され、それにはバラックの舞台は小さすぎた。そこで我々は劇をすべて野外で演じるように準備した。点呼場が劇場の条件を完全に満たしていた。そこから調理場に向かって坂が下っていて、調理場の前を舞台にすれば、あとはバラックの椅子を並べれば観客席の出来上がりだった。舞台作りが始まって、舞台装置などすべてが完成したところで、司令官がバラックでやるべきだと、野外での上演を禁止すると言った。我々は彼に、十分な広さがないということを知ってもらおうとした。我々は上演を中止すると脅してやっと、彼は折れた。本来はダメだが、一度だけならよいと。なぜなら、彼はちょうど青野〔原〕で演習している連隊の将校を招待していたからだ。

(「ケルステン日記」より)



図 46 バラック内での演劇会

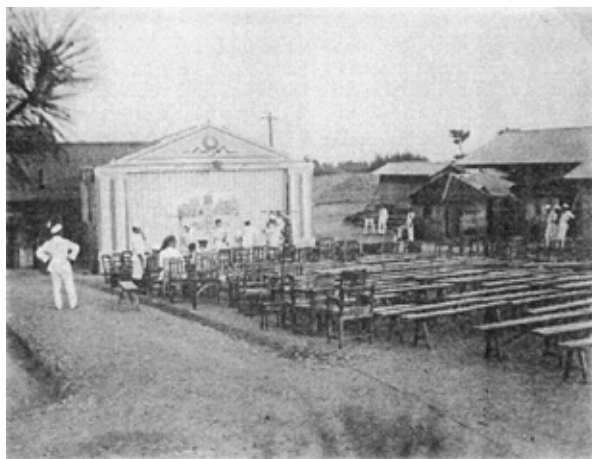


図 47 野外に作られた舞台と観客席



図 48 演劇会《ヴァラエティの夕べ》のチラシ



図 49 演劇《壊れ甕》



図 50 演劇《靴踊り》

食事

捕虜たちにとって、収容所の食事は決して満足のいくものではなかったようです。

食事は以前の福岡よりも少なかったが、それは理解できないことではなかった。なぜならば世界中で食糧難が深刻であり、60グラムという1日の割り当て分からの増量は考えられなかったからである。

(「ケルステン日記」より)

きわめて少なくなったパンの割り当てのために、我々はもっと安いが劣悪な黒パンに頼らざるを得なかった。それはまだ手に入るからである。さらに数か月後、パンにかなり多くのジャガイモでんぷん粉が混ぜられるようになったが、それはいつも湿って生焼けであり、食べられる代物ではなかった。

(「ケルステン日記」より)



図51 食事の様子

1915年以来出された要望は、食糧の割り当てが少なくなったので、それに関することが多くなった。例えば豚の飼育、パンを自分たちで焼く、台所にパン焼きがまを作る（場所は十分にある）、石鹼を作る（当時はまだ油脂が何とかなった）。要望はすべて主計長によって却下された。

(「ケルステン日記」より)

食事の改善に関する要望が聞き届けられたのは、新しい主計長が着任した1918（大正7）年のことでした。パン焼きがまを設置し、捕虜自らがパンを焼くことが許されたのです。

我々は代わりにもっと小さい白パンの割り当てを要求し、実現させた。そして新しい主計長は、パンを自分たちで焼かせてほしいという希望を叶えてくれた。ケーキ製造のマイスター1人とパン焼き職人2人がきわめて短期間で、台所の中心に十分な大きさをもった完璧なパン焼きがまを設計してこしらえた。そのかまで最良のオーストラリア産小麦粉を使って良質の白パンを焼き、パンの割り当ては以前に比べてほぼ2倍の量となった。2人の煉瓦積み工の功績も忘れてはならない。パン焼き職人には自分で調達した物を加えてお菓子を焼き、「お金持ち」「所持金を持っている捕虜」に売ることが許されていた。

(「ケルステン日記」より)



図52 パン焼き場



図53 調理場

豚の飼育

1918（大正7）年4月には、捕虜たちで豚を飼育することが認められました。豚の飼育係となったケルステンはその経緯や様子を特に詳しく日記に書き残しています。

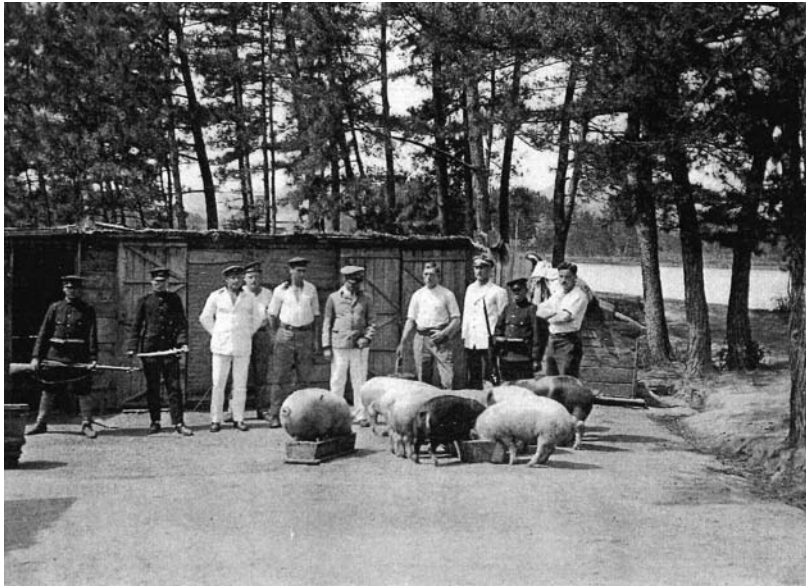


図 54 豚の飼育場

結局 1918 年 4 月半ばに豚を飼うことも許された。給食業者が自宅に新しい豚小屋を造ったからである。彼はその代わりにそれまで使っていた豚小屋を使わせてくれたが、それは収容所から約 800 メートル離れた林の 2 つのせき止められた沼の堰堤にあった。その小屋は豚が 15 頭も入ればいっぱいだったが、我々はすぐにビール箱の板で増築して 3 分の 1 だけ広げた。飼育はジーマンス社によって伝染病基金として提供された 120 円を使った。豚はいつでも私たちの食事に供されるために収容所側に売却されるはずであり、したがって基金は確保されるという思惑があった。1 頭の割り当てられた繁殖用の雌豚と 2 頭の食用の豚、そこから豚の飼育が始まった。私たちは 1 頭の病気の子豚を手に入れた。その豚を我々は日本人に知られることなく私のバラックで引き取り、寝台の板張りの板を外して、その子豚を寝台の下、すぐに取り外せる低い木の格子の中に置いた。

そんな具合で我々はその子豚を飼うことになり、確かに子豚の命を救うことになった。なぜなら、我々は夏は？時から 11 時までと 1 時から 6 時まで、また冬は 8 時から 11 時までと 1 時から 5 時まで家畜小屋にいたので、小屋だったら世話できなかっただろうからだ。我々のパンの割り当てがほぼ 2 倍になった後で、60 人の食事から大量の残飯が出た。そこで子豚はたらふく食い、「金持ち」が食堂のミルクをめぐんでくれた。毎日きれいにつみ取られた寝藁をあてがわれた「ムッツ」は 6 週間たって丈夫になって豚小屋に入ることとなった。ムッツは犬のように人慣れしていて忠実であり、呼ぶと我々の所に来て、しばしば自由に走り回った。養豚業者というよりも、豚の世話係の役割を果たしたのは、農民と 2 人の肉屋だった。1918 年 8 月繁殖用の雌豚が 7 頭の子豚を産んだ。収容所長は彼のまだ使っていない 2 つの馬小屋を使わせてくれ、それが今や出産の小屋となった。そして母豚と子豚は最良の状態で育てられ、子豚はたくましく育った。

同じ頃、2 人の肉屋は給食業者から豚を買い、それを収容所内でつぶして所内販売用のソーセージを作る許可を得た。その代わりに私が豚の世話をするようになった。それで豚の世話係は 2 人になったが、溜まった仕事に合わせて、我々は手伝いを 6 人まで連れて行くことができた。その人数は出発 30 分前に報告しなければならなかった。その後は文書での許可を当局から取り、2、3 人の歩哨と 1、2 人の警官による監視の下、飼料を手押し車で小屋へ運んだ。パン焼きの残飯を使って飼料代をかなり浮かしたので、7 頭の子豚を含む 24 頭の動物でときには小屋を満杯にすることができた。

（「ケルステン日記」より）

ケルステンたちは衛兵や警官の監視下であるとはいえ、豚を世話するために収容所外の飼育場に通っていました。そして、捕虜たち自身の手で食肉への加工やソーセージ作りが収容所内で行われていました。豚の飼育場の場所は調査によって、繁昌中池と呼ばれる池のほとり（別府東町）であったことが判明しています。



図 55 「豚の飼育場」の現在（別府東町）



地図 6 当時の地図（繁昌池周辺）

またこの池のすぐ北にある上池では、捕虜たちが当時禁じられていた水泳を楽しむことができました。

暑い日には水浴びしたり泳ぎたい気持ちが我々を襲ったが、それは司令官によって強く禁じられていた。捕虜が死んでもどんな補償もないからだ。我々2人の豚の飼育係は3～3.5メートルの広さの堰堤で争いとなり、水を背にしていた飼育係が一突きされて水門の端、水深5メートルの所に落ちて、浮かび上がってこなかった。そこでもう1人が飛び込んだ。20～25メートルくらい離れた所で2人は浮かび上がった。監視人はびっくりしたが、次の瞬間我々を笑い、それをもう一度見たがった。泳ぎは強く禁じられているからと、我々が断ると、彼らは捕まらないように自分たちが見張っておいてやると答えた。そうして我々と、さらに多くの手伝い人もほとんど毎日泳ぐことができるようになったのだった。

（「ケルステン日記」より）

捕虜たちが水泳をしていた池は、飼育場付近の繁昌上池です。水泳の様子は、ハンクシュタインが遺した写真にもあります。



図 56 水泳をする捕虜



図 57 現在の繁昌上池（加東市高岡）

捕虜間の反目

青野原収容所には、オーストリア＝ハンガリーの民族構成を反映して、さまざまな民族出身の捕虜が収容されていました。バラックの割り当てでもその構成を反映していました。

オーストリアの捕虜は、およそ9つの民族集団からなっていた。そのためハンガリーやクロアチアのバラックがあった。私は一度、喧嘩している2人のハンガリー人をなだめようと、次のように言った。「君らはとにかくみんなハンガリー人なのだ、とにかく仲良くしろ」。2人は次のように私に言い返した。「我々皆がハンガリー人だとは言えない、我々ハンガリー棟には6つの民族がいる」。クロアチア棟においても同様であった。バラックの左半分はクロアチア人で60人、右はドイツ系オーストリア人35人とドイツ人25人だった。

(「ケルステン日記」より)

このような民族の違いによる争いがあったことが、青野原収容所の記録(防衛省防衛研究所所蔵『欧受大日記』)に記されています。

右十三名ノ者ハイストリア、トリエスト、及ビダルマチア地方ノ出身ニシテ、元来伊太利〔イタリア〕系ニ属シ、深く自己ノ伊太利人ナルコトヲ自觉シ、心竊〔ヒソ〕カニ伊太利ヲ謳歌スルノ傾向アリ。収容当初ヨリ常ニ他ノ塹国〔オーストリア〕俘虜ヨリ疎外セラレ、勢ヒ孤立ノ境遇ニ立チツツ経過シ来タリシガ、客年初夏、伊太利ノ宣戦シテ連合国側ニ参加セル以来、一層独塹国俘虜ノ反感を喚起セシモノノ如ク一般ノ者ハ彼等ヲ目スルニ、伊太利ニ心ヲ寄スル非国民ナリトシ、事毎ニ侮辱ヲ加フルノ状勢ナリシガ、客年六月遂ニ些事ノ動機ヨリ彼等少数者ヲ圧迫シ、暴力ヲ加ヘタルコトアリ。爾来陰ニ陽ニ其ノ程度ノ迫害を加ヘラルルガ如ク屢次保護ヲ願ヒ出ゾルコトアリ。

(「俘虜中隔離ヲ要スル者ノ件報告」『欧受大日記』1916〔大正5〕年)

イタリアは開戦時中立でしたが、1915年5月にはオーストリア＝ハンガリーに対して宣戦布告をしていました。したがって、イタリア系捕虜たちは「敵国人」でもあり、周囲を恐れて保護を求めたのです。実際にイタリア系捕虜の中には、イタリアが属する協商国陣営に協力するためとして「破壊用デナミット(ダイナマイト)弾」と「飛行機用爆弾」の図面を提出し、それを戦場で役立ててほしいという願いを出した者もいました。

当所収容俘虜中ノ伊太利種族ニ属スル塹国海軍三等水兵ブルノー、ピンスキーハ伊国軍ニ参加ノ希望ヲ有スルモ現下ノ境遇ハ到底之ヲ許サザルニ依リ自己ノ代理者トシテ戦場ニ立タシムル目的ナリトテ自己ノ考察ニ係ル破壊用デナミット弾及飛行機用爆弾ノ断面図ヲ呈出シ願ハクハ日本政府ニ於テ審査ノ上有効ト認メラレナハ連合国側ノ用ニ供スル如ク取扱ワレ度シト申出候、斯術上何分ノ参考ト相成儀トモ被存候ニ付本人調製ノ別紙断面図及送付候也。

(「俘虜ノ考案ニ係ルデナミット弾計画図送付ノ件通牒」『欧受大日記』1916〔大正5〕年)

このように、同じオーストリア＝ハンガリー捕虜兵といっても、民族や出自などで大きな隔たりがありました。

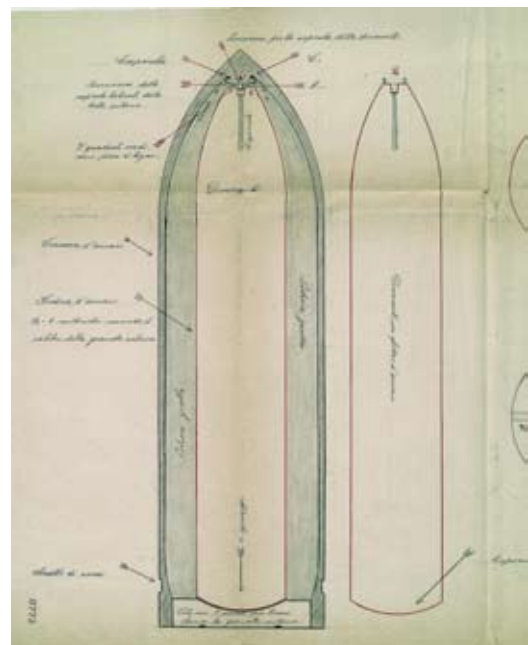


図 58 提出された「破壊用デナミット弾」図面

またこうした民族間の反目が、実際の騒擾事件に発展することもありました。

官下加東郡青野原俘虜収容所ニハ俘虜独逸人約二五〇名奥国人二二〇名ヲ收容シ居レルカ本月十日午後九時三〇分頃同収容所ニハ俘虜独逸人ト奥国人トノ間に紛擾を醸シ独逸人俘虜ハ奥国人俘虜「バチリウエクセラウ」ホカ二十五名ト格闘シ「バチリウエクセラウ」ノ右手ニ負傷セシメタリ。原因其ノ他ニツキテハ目下尚詳細調査中ナルモ過般奥国内ニモ反乱勃発シ中欧同盟側ニ不利ヲ来タシタルハ反乱者コロアツベンニ属スルモノニ起因セリ。

(「俘虜紛擾ニ関スル件」『欧受大日記』1918〔大正7〕年)

1918(大正7)年7月、つまり大戦末期におきたこの騒擾事件には、以下のような原因がありました。ドイツ人捕虜たちは、オーストリア＝ハンガリー国内で反乱が起きているためにドイツ・オーストリア陣営が不利になっていると考えました。そして、その反乱とつながっていきそうなスラブ系の捕虜たち(「コロアツベン」＝クロアチアと思われる)と喧嘩になったのです。青野原収容所は戦場から遠く離れていましたが、大戦の経過(イタリアの参戦や国内での反乱)は収容所内の捕虜にも影響を与えていました。

捕虜の葬儀

姫路・青野原収容所では、収容中に死亡した捕虜が6名いました。その中には、自ら収容所内の井戸に飛び込んで亡くなった者もいました。

ある朝点呼の際に1人の男がおらず、大規模な搜索が始まった。やがて彼のサンダルが井戸堀の前で、ハンカチが洗面台の上で見つかった。彼のベッドの隣人は、彼が5時頃起きたことを思い出した。1人が縄をつたって井戸におりて、仲間の遺体を収容した。彼はキール出身で誰からも好かれていた。彼の火葬には、捕虜兵の代表の参加が許可された。彼の他にも我々はさらに1人の仲間を失った。

(「ケルステン日記」より)



図 59 捕虜の墓



遺骨の引き取り手が見つからなかったため、姫路市の名古山霊園の陸軍墓地内に3名の墓地が、現在も残されています。

図 60 姫路名古山霊園陸軍墓地に残る捕虜の墓

5. 地域社会との交流

捕虜製作品展覧会

1918（大正7）年12月14日から19日にかけて、青野原収容所において捕虜が製作した作品の展覧会が行われました。展覧会の開催に際して、宮本秀一青野原収容所所長は次のように報告しています。

展覧会ノ趣旨

本展覧会ノ趣旨ハ獨逸国内ニ於ケル教育参考品・農工藝品及日用品ヲ製作セシメ将来ノ資料ニ供スル為メ開設セントスルモノナリ

展覧会ノ場所期日

場所 加東郡高岡村青野原俘虜収容所南側廠舎

開會期日及時間 大正七年十一月十五日ヨリ同二十日ニ至ル六日間毎日午前九時ヨリ午後三時迄

展覧物品ニ関スル説明

展覧物品ハ獨逸俘虜カ収容所内ニ於テ極メテ少数且不完全ナル器具並最モ狭隘ナル場所ニテ製造シタル者ナルヲ以テ一小品ト雖多数ノ日子ト勞力ヲ要シタルモノニシテ品目及数量ハ別紙目録ノ如クナルモ其主要ナルモノニ關シテハ左ニ概要ヲ説明ス

（「展覧会開催ノ件何」『欧受大日記』1918〔大正7〕年）

後に開催期間は、12月14日から19日までの6日間に変更されましたが、展覧会は多くの人々で賑わったようです。ドイツやオーストリアの技術を用いて製作された作品は、日本側にとって今後の参考になると考え、収容所当局は展覧会を開催しました。一方、捕虜たちにとっても、展示販売は現金収入を得る貴重な機会となりました。

出品予定品として挙げられている品目と数量をまとめると次の通りになります。

品 目	数 量	備 考
楽 器	18	ピアノ、セロ（チェロ）、ヴァイオリン、チイテル、ギター、チムパール
木 工 品	102	額縁、手拭掛、巻煙草入、文具類、文庫、茶盆
金 属 製 品	144	灰落、巻煙草入、机飾、大砲ノ模型、自動車模型
諸 器 械 類	6	石油発動機3、釧製造機、籾取器械、秣草切取器械
靴	11	
絵 画	94	
標 本 類	10	タンク、機械水雷模型、船舶（カイゼリン・エリーザベト号）、奥国農家ノ模型
写 真	50	
玩 具	150	
雑 品	6	
食料品・菓子類	42	腸詰め、カステラ
そ の 他		展覧物目録、記念絵葉書、馬鈴薯栽培法、豚の飼育および屠殺法

（出典：大津留『青野原俘虜収容所の世界』、98頁）

出品された作品を見てみると、絵画や木工品、金属製品、機械類もあり、軍艦の乗組員が大多数を占める青野原収容所の捕虜たちが技術者の集団であったことを示しています。特に機械類は、「数は少ないが、人々から最も好評を博していて、石油発動機とボタン製造機は購入希望者がとりわけ多く、石油発動機に至ってはその概要が鷺城新聞と東京報知新聞に掲載されたため、各地から注文が続々と来ている」（「展覧会開催ノ件何」と報告されています。また、籾取器械と秣草切取器械は加東郡農会の依頼で製作されました。展覧会に関する別の資料（ドイツ・ヴェルテンブルク州立図書館所蔵「展覧会ガイドブック」）によると、青野原収容所の写真を数多く残したハンクシュタインも、収容所とその周辺を写した写真帳を出品していました。

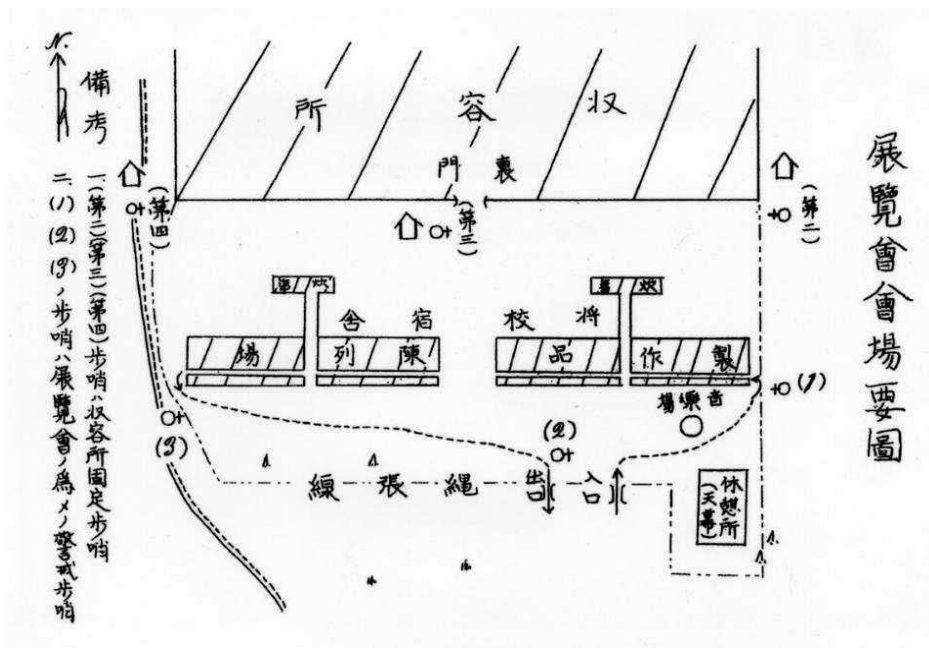


図 61 展覧會會場要図



図 62 展覧會の様子

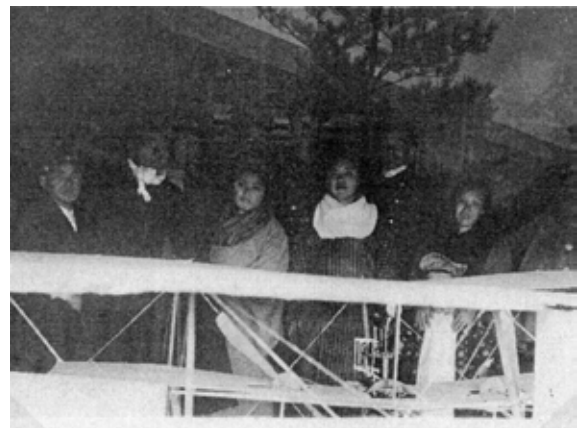


図 63 展示品と見物客

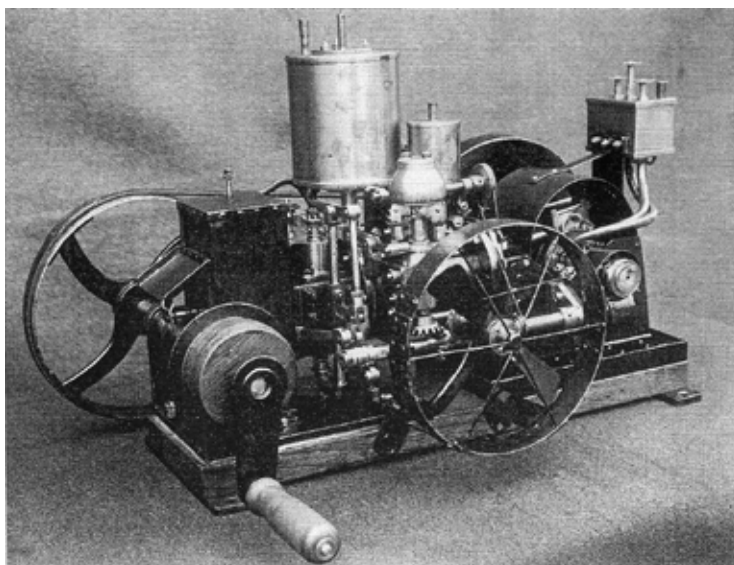


図 64 捕虜製作品「金属機械」



図 65 捕虜製作品「チェロ」

多くの人々の関心を集めた捕虜製作品展覧会を通じて、青野原捕虜収容所の捕虜たちと地域社会とがつながっていました。そのつながりを示すものとして、捕虜が製作した作品が現在も残されています。



図 66 捕虜製作品「灰落（井戸型）」



図 67 原型となった収容所内の井戸



図 68 捕虜製作品「煙草道具」



図 69 捕虜製作品「煙草道具」

これらの作品は捕虜製作品展覧会の際に販売されて、近隣住民の手で大切に保管されてきました。これらは当時を知るための貴重な資料となっています。次の絵葉書も、捕虜作品展覧会に出品されたものです。



故郷によろしく！



小鳥だったらなあ！



今や6年！



また故郷に帰りたいなあ！

図 70 捕虜製作品「絵葉書」

展覧会に出品されたもの以外にも、青野原収容所の捕虜ゆかりの品が残されています。農家を描いた油絵は、捕虜が描いて地元の方に送った作品です。



図 71 刺繍

右の刺繍には、ドイツ軍艦旗が掲げられ、上部に自らの軍役を誇る言葉が刺繍されています。また中央部には「我々は、皇帝陛下と祖国のために中国沿岸を守備してきた」と記されています。

下部にドイツ軍が駐留していた中国膠州湾と思われる景色が描かれ、その上にある「砲兵 Kanonier」「イグナッツ・シェフチック Ignatz Schefczyk」は、青野原収容所のドイツ人捕虜（オーバーシュレージエン出身）の名前です。

これら2つの刺繍は、捕虜が収容所に持ち込み、後に譲り渡した物だと考えられます。

左の刺繍には、オーストリア帝国を象徴する紋章（双頭の鷲、その頭上には帝冠、そして胴部には皇帝フランツ＝ヨーゼフの頭文字 FJ を加えたハプスブルク＝ロートリンゲン家の紋章）が掲げられています。そして、この帝国紋章の下に、捕虜たちが乗っていた「皇妃エリーザベト」号も描かれています。

「中国 1913 年」が、最後に母港を発ち、東アジアに派遣された年を示しており、「日本 1916 年」が収容所に収容されている現在を示していると考えられます。名前が刺繍されているフランツ・マララン Franz(c) Malalan は、「皇妃エリーザベト」号の乗員だった捕虜兵（二等水兵）で、当時オーストリア＝ハンガリー領内だったトリエステ近郊の出身者です。



図 72 刺繍



図 73 農家を描いた油絵

上の絵を描いたのは、ヴィクトル・クロブチャル Viktor Klobucar (1878-1965) という人物です。彼は、オーストリア＝ハンガリー共通海軍大尉であったクロアチア人です。ヴィクトル・クロブチャルは、軍人貴族の家系に生まれ、士官学校卒業後は海軍に入隊しました。海軍では、海軍航空部隊の設立に携わり、オーストリア海軍初の飛行部隊指揮官となります。自身も操縦士であり、1911年には英国一周飛行機レースにも出場しました。

その後、クロブチャルは「皇妃エリーザベト」号の乗組員となり、青島にて第一次世界大戦を迎えました。他のオーストリア＝ハンガリー兵と同じく、青島陥落後に捕虜となり、日本で捕虜生活を送ることになりました。1918（大正7）年8月に久留米収容所から青野原収容所へ移送され、その年の12月に青野原で開催された捕虜製作品展覧会において、14点の油絵を出品しています。

ここに掲載した油絵は、クロブチャルが1919年の麦秋を描いたものであり、モデルとなった高岡（加東市）の農家に贈られたものです。

第一次世界大戦の結果、オーストリア＝ハンガリーは崩壊し、南スラブ地域には「ユーゴスラビア」という新しい国家が生まれました。クロブチャルの出身地クロアチアもこの国に含まれていました。1919（大正8）年12月5日、クロブチャルは「ユーゴスラビア」人（青野原71名・習志野9名）を引率し、他のドイツやオーストリア＝ハンガリー捕虜に先行して帰国を果たしています。

遠足

青野原収容所では、通常毎週ごとに半日程度の遠足が行われており、そして1か月に一度は一日がかりの遠足が行われていました。その様子が「ケルステン日記」にも登場します。

我々は毎週半日、4週に一度は一日の遠足を楽しんだ。[中略] 遠出の遠足は次のような様子だった。遠出をしたくない者は少なかったが、着ていくものや特に長靴を借りなければならなかったので、参加できたのは200人ほどだった。しかも40人の兵士と警察官の監視付きだった。見通しの利く地点で一旦止まったが、それは監視部隊が我々を取り囲んでからだった。海が見えるほど高いところへ我々が登ることもあった。

(「ケルステン日記」より)

この記述によると、遠足の参加者は毎回200人ほどで、捕虜たちを警護する衛兵40人と警官20人が随行していました。また遠足に行く捕虜たちの姿も、ハンクシュタインの写真に数多く収められています。



図 74 巡礼者と捕虜の隊列



図 75 捕虜の隊列



図 76 蓬莱橋（西脇市）を渡る捕虜の隊列

捕虜がやってきた前後に東播磨で鉄道・電気事業など近代化に向けたインフラの整備が進められていました。

右の「明治末期の絵葉書」には、電柱がありません。明治44年に東播磨電気株式会社が設立され、明治45年に点灯されました。したがって、その後に訪れた捕虜たちの写真では、電柱を確認することができます。



図 77 明治末期の蓬莱橋（絵葉書）

捕虜たちが遠足などで収容所の外に出かけた際に写したと思われる記念写真もあり、収容所の近隣に住む人々が捕虜たちと交流していたことがうかがわれます。



図 78 近隣住民たちとの記念写真



図 79 近隣住民たちとの交流



図 80 近隣住民たちとの記念写真



図 81 近隣住民たちとの記念写真





6. 100 年前の風景

ここまで見てきたように、捕虜たちは遠足、ときには労働のために、収容所外の世界とつながっていました。彼らがそこで見た世界は、100 年前の日本の風景であり、現在私たちの住む場所の 100 年前の姿です。

下の 3 枚の写真は、かつての北条の町並みを写したものです。



図 82 鉄道開通時の北条

図 83 捕虜が撮影した北条

図 84 北条を眺める捕虜たち

左の写真は、青野原収容所が開設される直前の 1915(大正 4)年 3 月に北条を地元住民が写したものです。ちょうど播州鉄道の栗生駅～北条町駅間(北条支線)が開通し、北条町駅の開業でにぎわう姿が捉えられています。中央と右は、捕虜が撮影した写真です。つまり、青野原収容所に捕虜がやってきた 1915(大正 4)年 9 月以降に撮影された写真ということになります。左の写真と比べると、北条町駅の周りに大きな建物ができているのが分かります。そして右の写真になると、すでにあった建物の向かい側に新しい建物が増えています。したがって、これらの写真は撮影時期によって左から順に並んでいるということになり、捕虜が北条を複数回訪れていることが分かります。

また、これらの写真は後景にある山並みや道路の様子から、金刀比羅神社(北条町東南)から撮影した風景であることが分かっています。



図 85 現在の北条(金刀比羅神社から)

100 年前と現在

ここからは、調査によって撮影場所が判明している写真を中心に紹介していきます。100 年前と現在の様子を見比べてみてください。

一乗寺（加西市坂本町）



図 86 一乗寺三重塔



図 87 現在の一乗寺三重塔



図 88 一乗寺入口での記念写真



図 89 現在の一乗寺入口



図 90 一乗寺石段（本堂下）



図 91 現在の一乗寺石段（本堂下）



図 92 一乗寺清涼公園と捕虜たち



図 93 一乗寺清涼公園（絵葉書）

捕虜の写真は、絵葉書の左側に見える石橋で撮影されています。



図 94 一乗寺地藏院内



図 95 現在の一乗寺地藏院内

大日寺（加西市野上町）



図 96 大日寺



図 97 現在の大日寺



図 98 大日寺での集合写真

※発見された写真の左右を反転しています。



図 99 現在の大日寺

奥山寺多宝塔（加西市国正町）



図 100 奥山寺多宝塔



図 101 現在の奥山寺多宝塔

酒見寺従軍記念碑（加西市北条町）

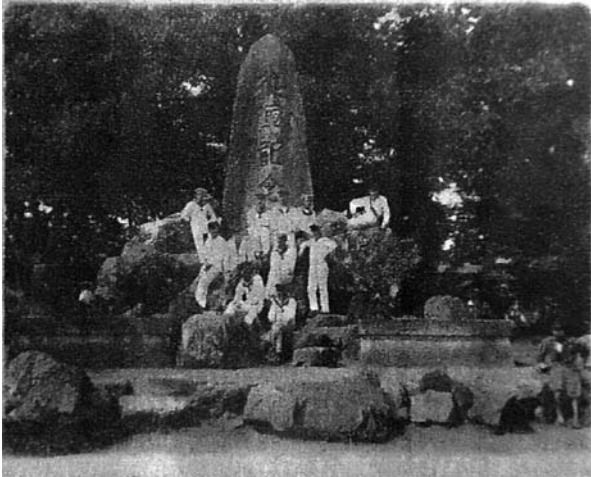


図 102 酒見寺従軍記念碑での記念撮影



図 103 現在の酒見寺従軍記念碑

乎疑原神社（加西市繁昌町）



図 104 乎疑原神社



図 105 現在の乎疑原神社

常吉天満神社（加西市常吉町）



図 106 常吉天満神社



図 107 現在の常吉天満神社

日吉神社（加西市池上町）



図 108 日吉神社



図 109 現在の日吉神社

普光寺（加西市河内町）

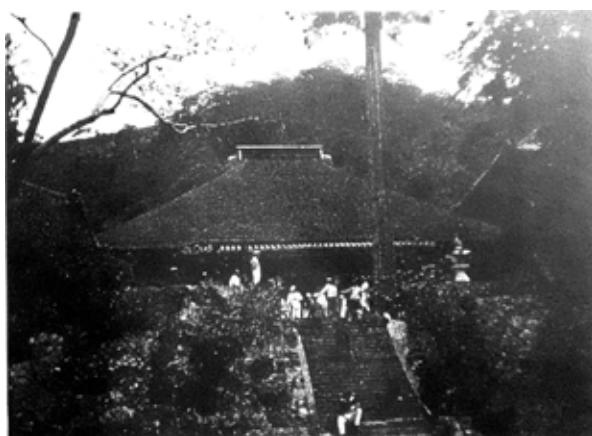


図 110 普光寺



図 111 昭和初年頃の普光寺

捕虜たちが撮影した写真の中には、当時の日本の人々の様子を捉えたものも多く含まれています。



図 112 日本の女性たち



図 113 電柱が立つ集落



図 114 民家の様子



図 115 地元の子どもたち

加西市外

佐保神社（加東市社）



図 116 佐保神社楼門



図 117 現在の佐保神社楼門

八志路幼稚園（加東市社）



図 118 八志路幼稚園

左の写真は、かつて社にあった八志路幼稚園の様子を捕虜が撮影したものです。園児たちが着ている特徴的な服装から、八志路幼稚園だと特定できました。この服装は、学習院の制服を取り入れたものと言われています。

閼龍灘（加東市上滝野）



図 119 閼龍灘



図 120 現在の閼龍灘

光明寺（加東市光明寺）



図 121 光明寺常行堂



図 122 現在の光明寺常行堂



図 123 光明寺大慈院本堂



図 124 現在の光明寺大慈院本堂

光明寺については、大慈院や常行堂などを撮影した写真が何点も残っていますが、本堂を収めた写真は残っていません。というのも、江戸末期に本堂が火災で焼失してしまっていたからです。本堂が再建されたのは、捕虜が帰国した後の大正 14 年になります。

小野中学校〔現・兵庫県立小野高等学校〕（小野市西本町）



図 125 小野中学校で柔道を見学する捕虜たち



図 126 明治 36 年に竣工した寄宿舍



図 127 小野中学校鳥瞰図（大正 10 年 9 月作）

7. 捕虜の帰国と青野原収容所の閉鎖

第一次世界大戦は 1918 年 10 月に停戦し、翌年に講和条約が調印されました。オーストリア＝ハンガリーは解体され、被支配地域からいくつかの新国家が誕生しました。このような新国家に属することになった捕虜はいち早く解放され、それから残された捕虜たちも解放されていくことになります。彼らはやって来たときと同じ播鉄大門駅（1916〔大正 5〕年に大門口駅から改称）から列車に乗り、青野原を離れました。右の写真は、写っている捕虜たちが冬服を着ていることから、解放時のものだと思います。



図 128 解放時と思われる播鉄大門駅

青野原に収容されていた「ユーゴスラビア」人捕虜 71 名は、クロブチャルに率いられ、1919（大正 8）年 12 月 5 日に神戸港から出航するスヒンクス号で帰国しました（『中外商業』1919〔大正 8〕年 12 月 4 日）。その後 12 月 27 日には、青野原の捕虜 222 名が神戸を出航する喜福丸に乗船し、習志野・似島・久留米に収容されていた捕虜たちとともにドイツ・ヴィルヘルムスハーフェン（「ヴィルヘルムの港」という意味の地名）に向かいました。



図 129 播鉄大門駅の配置図

1919年12月半ばになってやっと、12月27日が愛する故郷への出発日ということが知らされた。オーストリア人の中で幹部は全員帰れるが、残り66人の定員は146人からくじ引きで選び、はずれた80人は残らざるを得ないことになった。我々2人の豚の飼育係が5時頃豚小屋から帰ってきたときには、当たりくじはまだ残っていた。もう1人の飼育係が1912年次で、私が1913年次だから、彼がまずくじを引くべきだったのに、彼は断った。そこで私がまず引いたら、当たりだった。



図 130 神戸港に停泊する喜福丸

(「ケルステン日記」より)

捕虜たちを乗せた喜福丸は、青島やスマトラ島に立ち寄りながら、故国ドイツのヴィルヘルムスハーフェンに到着しました。しかし、帰国を喜ぶケルステンが目にしたのは、敗戦後変わり果てたドイツの姿でした。

日本を發つて63日後、我々はヴィルヘルムスハーフェンに上陸した。我々が当地の水門に入ると、腹をすかした子どもが我々にパンをねだった。この数日興奮することが続き、また故国を前にして興奮していたため、パンの消費が減って余っていた。そこで我々は白パンを水門の貯水池の端に向かって投げた。我々の眼前で起こったことを、私は生涯忘れないだろう。パンを投げると、ドイツの水兵、兵士がパンに向かって突進し、子どもたちを押しつけてパンを奪い合つたのである。その時私はデッキの下へ飛び込んで、しばし泣かざるを得なかった。



図 131 ヴィルヘルムスハーフェン

(「ケルステン日記」より)

最後に解放された捕虜たちは、翌年1月27日神戸出航のハドソン丸に乗船し、それぞれの目的地へと出発していきました。その後、役割を終えた青野原俘虜収容所は2月29日に閉鎖されました。

姫路・青野原俘虜収容所 略年表

1914 (大正 3) 年	7 月 28 日	第一次世界大戦が勃発する。
	8 月 23 日	日本がドイツへ宣戦布告する。
	11 月 7 日	青島のドイツ軍基地が陥落する。
	11 月 11 日	東京、名古屋、大阪、姫路、松山、丸亀、福岡、熊本に捕虜収容所の開設が告示される。
	11 月 20 日	広島から鉄道で 300 名余りの捕虜が姫路に到着する。
	11 月 25 日	姫路捕虜収容所内で酒保が開かれる。
	11 月 26 日	姫路市の堀市長が 3 か所の捕虜収容所を慰問する。
	12 月 1 日	捕虜の遠足が許可され、姫路城に登城する。
	12 月 2 日	大分、徳島、静岡の 3 市に捕虜収容所の開設が告示される。全国 12 市となる。
	12 月 25 日	収容所内でクリスマスのお祝いが行われる。
1915 (大正 4) 年	1 月 4 日	市川の大日川原へ遠足に行く。この頃から捕虜の職業調査が行われる。
	3 月 19 日	船場本徳寺の収容所内で捕虜間の暴行事件が発生する。
	4 月 6 日	夢前川の田井河原へ遠足に行く。
	6 月 3 日	捕虜移転指令が出され、10 日から青野原において収容所の建設が始まる。
	6 月 7 日	広峯山へ遠足に行く。
	9 月	城北練兵場の地均し作業に捕虜が従事する。
	9 月 15 日	捕虜に恥辱や不都合を与えないよう注意を促す小野市長の通達が出される。
	9 月 20 日	青野原収容所へ移転するため、姫路駅から鉄道で移動する。
	9 月 21 日	姫路収容所が閉鎖される。
	9 月 25 日	福岡収容所から 90 名の捕虜が青野原収容所へ移動される。
1916 (大正 5) 年	10 月	イストリア・トリエステ・ダルマチア出身者 13 名が丸亀収容所へ移される。
	3 月 31 日	イタリア系捕虜ブルノー・ピンスキーが爆弾の図面を提出する。
1917 (大正 6) 年	11 月	福岡収容所から 74 名が移送されてくる。
	10 月 29 日	オーストリア＝ハンガリーの利益代表である駐日スペイン公使が青野原収容所を訪問する。
1918 (大正 7) 年	3 月	物価高騰により軍靴の修理が多額となったため下駄で代用することになる。
	5 月	泉平太郎の「発動機的设计及びポンプ製造」工場で捕虜 6 名が 1 日 7 時間勤務する。
	5 月	酒保を業者による請負販売から捕虜から選ばれた委員 4 名による委託販売に変更する。
	7 月 10 日	捕虜の間で大規模な騒擾事件が起こる。
	7 月	パンを焼くかまを新設する。以後捕虜自身がパンを焼く。
	7 月	国際赤十字の代表が青野原収容所を訪問する。
	8 月 2 日	久留米収容所の捕虜のうち 20 名が青野原収容所へ移送されてくる。
	11 月 6 日	捕虜が佐保神社を訪れる。
	11 月 9 日	インフルエンザによって捕虜製作品展覧会の延期が決定される。
	11 月 11 日	第一次世界大戦の休戦条約が調印される。
	12 月 14 日	捕虜製作品展覧会が行われる。(19 日まで)
1919 (大正 8) 年	2 月 19 日	収容所内でインフルエンザが流行し、捕虜 32 名が発症する。軍医と看護師にも発症者が出る。
	3 月 30 日	収容所で慈善演奏会が開催される。
	5 月	姫路師範とサッカーの親善試合が行われる。
	5 月	ヴィクトル・クロブチャルが麦秋の農家を描く。
	7 月 13 日	小野中学校とサッカーの親善試合が行われる。
	12 月 5 日	クロブチャルを含む「ユーゴスラビア」人捕虜が帰国の途に就く。
	12 月 27 日	本国に帰還する捕虜 222 名が神戸から出港する喜福丸に乗船する。
	12 月 27 日	本国に帰還する捕虜 222 名が神戸から出港する喜福丸に乗船する。
1920 (大正 9) 年	1 月 23 日	7 名が青島へ向かうために出発、また 7 名が国内の工場に就職するために出発する。
	1 月 26 日	最後まで残された捕虜 123 名が送り出される。
	1 月 27 日	最後の捕虜が神戸から出港するハドソン丸で帰国、又はオランダ領インド（現在のインドネシア）で警察官になるために出発する。
	2 月 29 日	青野原収容所が閉鎖される。

これまでの活動記録（神戸大学地域連携センター）

日 時	展示会（開催場所）	演奏会（演奏者）
2005 年 10 月 1 日 ～ 11 月 27 日	青野原俘虜収容所の世界—河合地区の近世・近代から現代—（小野市立好古館）	ふるさとをしのぶ音楽会（神戸大学交響楽団）
2006 年 10 月 20 日 ～ 11 月 5 日	俘虜収容所に生きる—第一次世界大戦時青野原収容所の世界（神戸大学）	青野原俘虜収容所再現コンサート（神戸大学交響楽団）
2008 年 9 月 3 日 ～ 10 月 29 日	青野原俘虜収容所「ウィーン里帰り」展覧会（オーストリア国立文書館）	青野原俘虜収容所「里帰り」再現コンサート（神戸大学交響楽団）
2009 年 11 月 12 日 ～ 11 月 21 日	青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009（在京オーストリア大使館）	青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009 講演会・再現演奏会（神戸大学交響楽団、習志野「町の音楽好きネットワーク」）
2011 年 10 月 1 日 ～ 10 月 30 日	青野原収容所俘虜がみた日本—新発見の俘虜撮影写真から—（小野市立好古館）	青野原俘虜収容所再現コンサート《時空をわたる楽の音》（神戸大学交響楽団、習志野「町の音楽好きネットワーク」）
2013 年 2 月 1 日 ～ 2 月 20 日	加西に欧州人がやってきた—青野原俘虜収容所と国際交流—（加西市立図書館）	
2014 年 11 月 10 日 ～ 11 月 28 日	第一次世界大戦開戦 100 年と青野原捕虜収容所—箱庭の中央ヨーロッパ—（神戸大学）	記念演奏会《音楽の架け橋》（神戸大学交響楽団、ウルリケ・ダンホーファー）

青野原捕虜収容所に関しては、関係自治体・機関の協力によって多くの展示会や演奏会、講演会および関連イベントがこれまで行われてきています。まず 2005 年には、小野市立好古館において特別展「青野原俘虜収容所の世界—小野市河合地区の近世・近代から現代—」が開催されました。そこで『小野市史』編纂以来の研究成果を発表し、地域に残された青野原収容所にまつわる資料を展示しました。その後 2006 年には、「俘虜収容所に生きる—第一次世界大戦時青野原収容所の世界—」と題して、神戸大学百年記念館展示ホールにて展示会を開催することができました。また、捕虜たちが収容所内で開いていた演奏会（《ふるさとをしのぶ音楽会》小野市うるおい交流館エクラ、2005 年）、《再現コンサート》神戸大学瀧川会館、2006 年）を再現しようという試みも行われました。演奏・神戸大学交響楽団、指揮・田村文生（神戸大学発達科学部准教授）で、収容所で開かれた「慈善演奏会」で演奏された曲目が実際に「再現」されました。展示会にあわせて再現演奏会を行うという、「見る」と「聞く」を組み合わせる形で、青野原収容所の実像を提示してきました。

過去 2 度の展示会と演奏会を受けて、捕虜たちを故国の 1 つであるオーストリアに「里帰り」させようというプロジェクトが立ち上がり、2008 年 9、10 月に「ウィーン里帰り」展覧会をオーストリア国立文書館展示室で開催することができました。これまでと同様、ウィーンの地でも、当時を再現する演奏（《「里帰り」再現コンサート》オーストリア国立文書館、軍事史博物館）が披露されました。地域に残された歴史遺産を発掘し、自治体と大学が連携することによってその成果が発信され、それをウィーンにまで届けることができました。ここに、地域連携事業の一つの可能性が示されていると言えるでしょう。

日唄修好 140 周年の 2009 年には、オーストリア大使館にて展示会、そして講演会・再現演奏会（ドイツ文化会館 OAG ホール、2009 年）を開催しました。2011 年、小野市立好古館で開催された展示会「青野原収容所俘虜がみた日本—新発見の俘虜撮影写真から—」では、ディーター・リンケ氏所蔵の貴重な写真から青野原収容所だけでなく、周辺地域の様子も紹介しました。この時の演奏会（《時空をわたる楽の音》小野市うるおい交流館エクラ、2011 年）では再現演奏に加え、H・ラムゼーガー作曲「交響詩《忠臣蔵》序曲」が披露されました。



図 132 2006 年の展示会の開会式



図 133 ウィーン軍事史博物館での演奏会

ラムゼーガーは当時神戸に住んでおり、アマチュアながら演奏・作曲活動を行っており、松山・坂東収容所を訪れていました。その彼が作曲した「交響詩《忠臣蔵》」は、坂東収容所エンゲル楽団が演奏しています。

2013年2月、「加西に欧州人がやってきた—青野原俘虜収容所と国際交流—」が加西市立図書館にて開かれました。そして、第一次世界大戦開戦からちょうど100年になる2014年には、加西市とオーストリア大使館との共同事業として、展示会「第一次世界大戦開戦100周年と青野原捕虜収容所—箱庭の中央ヨーロッパ—」と記念演奏会《音楽の架け橋》（神戸大学出光佐三記念六甲台講堂、2014年）を開催しました。特にオープニングセレモニー



図134 2011年の展示会の様子

と演奏会はオーストリアからゲストを招き、盛大に行われました。これ以外にも100年前の記憶を紹介するために、青野原収容所関連の写真パネルが2015年11月にフランス・インターナショナルスクールである東京国際フランス学園で展示され、2016年4月にはリセ・フランセ・ド・京都でも同様の写真パネル展示が予定されています。

こうした活動を経て、青野原俘虜収容所開設100周年という節目に加西市でそれを記念する事業が行われるに至りました。加西市で催された各行事を通じて、青野原収容所そしてその中にある「世界」と、地元である加西市とのつながりを感じていただけたのではないかと思います。

青野原俘虜収容所開設100周年事業

日 時	イベント
2015年 2月1日～20日	資料展示「100年前の加西と第一次世界大戦」（加西市立図書館）
2月 7日	講演会「世界の中の青野原」（講演者：大津留厚神戸大学教授）（アステシアかさい）
8月～3月	JR 青野ヶ原駅資料展示「大門口駅と青野原俘虜収容所」
9月12日	映像研修 映画『バルトの楽園』
9月16日	南部公民館 世界の料理教室（ドイツ料理）
11月 3日	青野原俘虜蹴球交流戦再現エキシビション
12月12日	青野原俘虜収容所開設100周年記念ウォーク（JR 青野ヶ原駅～青野原町）
2016年 1月16日	ビアマグ製作体験（小野市立あお陶遊館アルテ）
3月 5日	記念シンポジウム「加西に捕虜がいた頃—青野原収容所と世界—」
3月31日	冊子『加西に捕虜がいた頃—青野原収容所と世界—』発刊



図135 南部公民館 世界の料理教室（ドイツ料理）



図136 青野原俘虜蹴球交流戦再現エキシビション

資料名	出典・所蔵者・管理者・作成者等
地図 1 青野原の位置	白地図をトレースして作成
地図 2 青野原収容所の位置	『小野市史』第3巻、372頁
地図 3 言語によるオーストリア＝ハンガリーの民族分布図	大津留『青野原俘虜収容所の世界』、19頁
地図 4 第一次世界大戦前夜のヨーロッパ	大津留『ハプスブルク史研究入門』、巻末地図（全体図7）
地図 5 第一次世界大戦時の捕虜収容所	『ドイツと日本を結ぶもの』、116-7頁をもとに作成
地図 6 当時の地図（繁昌池周辺）	大日本帝国陸地測量部2万5000分の1地形図（大正12年測図、大正15年発行）に加筆して作成
地図 7 青野原収容所周辺図	国土地理院地図（ http://maps.gsi.go.jp/ ）に加筆して作成
図 1 青野原収容所内の様子	ディーター・リンケ氏所蔵
図 2 アウスグライヒ体制	大津留『青野原俘虜収容所の世界』、20頁
図 3 1910年のサラエヴォ	Rumpler, <i>Eine Chance</i> , S. 562.
図 4 フランツ＝フェルディナント夫妻	Rumpler, <i>Eine Chance</i> , S. 569.
図 5 フランツ＝フェルディナントが着用していた制服	石井大輔氏撮影
図 6 皇太子夫妻が乗っていた車	石井大輔氏撮影
図 7 『ウィーン新聞』（1914年6月29日発行）	オーストリア国立図書館所蔵
図 8 セルビアに対する最後通牒	オーストリア大使館提供
図 9 セルビアに対する宣戦布告書（草稿）	オーストリア大使館提供
図 10 姫路収容所	ディーター・リンケ氏所蔵
図 11 捕虜が製作したモニュメント（噴水）	姫路市史料編集室所蔵
図 12 製作者と思われるネヴィガー	ディーター・リンケ氏所蔵
図 13 青野原収容所の棟札	加西市教育委員会所蔵
図 14 捕虜が描いた青野原収容所（W. Tegge 作）	ディルク・ファン・デア・ラーン氏提供
図 15 青野原収容所へ移動する捕虜の隊列	個人蔵
図 16 青野原収容所配置図	神戸建築文化財研究所作成
図 17 加西市地形図（現在）	神戸建築文化財研究所提供
図 18 青野原収容所配置図を重ねた地形図	神戸建築文化財研究所作成
図 19 航空写真（昭和21年）	神戸建築文化財研究所提供
図 20 青野原収容所配置図を重ねた航空写真	神戸建築文化財研究所作成
図 21 青野原収容所の外観①	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 22 青野原収容所の外観②	『俘虜写真帖』（鳴門市ドイツ館提供）
図 23 青野原収容所の表門③	ディーター・リンケ氏所蔵
図 24 青野原収容所内⑩	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 25 布団が干されたバラック⑩	ディーター・リンケ氏所蔵
図 26 兵卒用宿舎の復元図	神戸建築文化財研究所作成
図 27 バラックの内部	ディーター・リンケ氏所蔵
図 28 将校用宿舎の復元図	神戸建築文化財研究所作成
図 29 将校用宿舎の内部	『俘虜写真帖』（鳴門市ドイツ館提供）
図 30 酒保	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 31 アサヒビールの旧エンブレム	アサヒグループホールディングス株式会社提供
図 32 バラック内でビリヤードをする捕虜たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 33 ビリヤードを楽しむ捕虜たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 34 当時使われていたビリヤード台	個人蔵
図 35 ハンクシュタインの東屋	ディーター・リンケ氏所蔵
図 36 東屋に集まる捕虜たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 37 捕虜の東屋	ディーター・リンケ氏所蔵
図 38 テニスをする捕虜	ディーター・リンケ氏所蔵
図 39 テニスコート	ディーター・リンケ氏所蔵
図 40 ボーリングレーン	ディーター・リンケ氏所蔵
図 41 組み体操	ディーター・リンケ氏所蔵
図 42 棒高跳び	ディーター・リンケ氏所蔵
図 43 姫路師範生との記念写真	個人蔵
図 44 サッカーをする捕虜たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 45 サッカーを観戦する人々	ディーター・リンケ氏所蔵
図 46 バラック内での演劇会	ディーター・リンケ氏所蔵
図 47 野外に作られた舞台と観客席	ディーター・リンケ氏所蔵
図 48 演劇会《ヴァラエティの夕べ》のチラシ	ディルク・ファン・デア・ラーン氏提供
図 49 演劇《壊れ壺》	ディーター・リンケ氏所蔵
図 50 演劇《靴踊り》	ディーター・リンケ氏所蔵
図 51 食事の様子	ディーター・リンケ氏所蔵
図 52 パン焼き場	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 53 調理場	ディーター・リンケ氏所蔵
図 54 豚の飼育場	ディーター・リンケ氏所蔵
図 55 「豚の飼育場」の現在（別府東町）	加西市教育委員会撮影
図 56 水泳をする捕虜たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 57 現在の繁昌上池（加東市高岡）	加西市教育委員会撮影
図 58 提出された「破壊用デナミット弾」図面	防衛省防衛研究所所蔵『欧受大日記』（大正5年3月31日）
図 59 捕虜の墓	ディーター・リンケ氏所蔵
図 60 姫路名古山霊園陸軍墓場に残る捕虜の墓	大津留厚氏撮影
図 61 展覧会会場要図	防衛省防衛研究所所蔵『欧受大日記』（大正7年10月26日）
図 62 展覧会の様子	ディーター・リンケ氏所蔵
図 63 展示品と見物客	ディーター・リンケ氏所蔵
図 64 捕虜製作品「金属機械」	ディーター・リンケ氏所蔵

図 65 捕虜製作品「チェロ」	ディーター・リンケ氏所蔵
図 66 捕虜製作品「灰落（井戸型）」	個人蔵
図 67 原型となった収容所内の井戸	石井大輔氏撮影
図 68 捕虜製作品「煙草道具」	個人蔵
図 69 捕虜製作品「煙草道具」	個人蔵
図 70 捕虜製作品「絵葉書」	個人蔵
図 71 刺繍	個人蔵
図 72 刺繍	個人蔵
図 73 農家を描いた油絵	個人蔵
図 74 巡礼者と捕虜の隊列	ディーター・リンケ氏所蔵
図 75 捕虜の隊列	ディーター・リンケ氏所蔵
図 76 蓬莱橋（西脇市）を渡る捕虜の隊列	ディーター・リンケ氏所蔵
図 77 明治末期の蓬莱橋（絵葉書）	小野市立好古館所蔵
図 78 近隣住民たちとの記念写真	ディーター・リンケ氏所蔵
図 79 近隣住民たちとの交流	ディーター・リンケ氏所蔵
図 80 近隣住民たちとの記念写真	ディーター・リンケ氏所蔵
図 81 近隣住民たちとの記念写真	ディーター・リンケ氏所蔵
図 82 鉄道開通時の北条	三枝正明氏所蔵
図 83 捕虜が撮影した北条	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 84 北条を眺める捕虜	ディーター・リンケ氏所蔵
図 85 現在の北条（金刀比羅神社から）	加西市教育委員会撮影
図 86 一乗寺三重塔	ディーター・リンケ氏所蔵
図 87 現在の一乗寺三重塔	小野市立好古館撮影
図 88 一乗寺入口での記念写真	ディーター・リンケ氏所蔵
図 89 現在の一乗寺入口	小野市立好古館撮影
図 90 一乗寺石段（本堂下）	ディーター・リンケ氏所蔵
図 91 現在の一乗寺石段（本堂下）	小野市立好古館撮影
図 92 一乗寺清涼公園と捕虜	ディーター・リンケ氏所蔵
図 93 一乗寺清涼公園（絵葉書）	個人蔵
図 94 一乗寺地藏院内	ディーター・リンケ氏所蔵
図 95 現在の一乗寺地藏院内	小野市立好古館撮影
図 96 大日寺	ディーター・リンケ氏所蔵
図 97 現在の大日寺	加西市教育委員会撮影
図 98 大日寺での集合写真	ディーター・リンケ氏所蔵
図 99 現在の大日寺	加西市教育委員会撮影
図 100 奥山寺多宝塔	ディーター・リンケ氏所蔵
図 101 現在の奥山寺多宝塔	小野市立好古館撮影
図 102 酒見寺従軍記念碑での記念撮影	ディーター・リンケ氏所蔵
図 103 現在の酒見寺従軍記念碑	加西市教育委員会撮影
図 104 乎疑原神社	ディーター・リンケ氏所蔵
図 105 現在の乎疑原神社	加西市教育委員会撮影
図 106 常吉天満神社	ディーター・リンケ氏所蔵
図 107 現在の常吉天満神社	加西市教育委員会撮影
図 108 日吉神社	ディーター・リンケ氏所蔵
図 109 現在の日吉神社	加西市教育委員会撮影
図 110 普光寺	ディーター・リンケ氏所蔵
図 111 昭和初年頃の普光寺	『ふるさとの想い出写真集 明治 大正 昭和 加西』（国書刊行会）より
図 112 日本の女性たち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 113 電柱の立つ集落	ディーター・リンケ氏所蔵
図 114 民家の様子	ディーター・リンケ氏所蔵
図 115 地元の子どもたち	ディーター・リンケ氏所蔵
図 116 佐保神社楼門	ディーター・リンケ氏所蔵
図 117 現在の佐保神社楼門	小野市立好古館撮影
図 118 八志路幼稚園	ディーター・リンケ氏所蔵
図 119 関龍灘	ディーター・リンケ氏所蔵
図 120 現在の関龍灘	小野市立好古館撮影
図 121 光明寺常行堂	ディーター・リンケ氏所蔵
図 122 現在の光明寺常行堂	加西市教育委員会撮影
図 123 光明寺大慈院本堂	ディーター・リンケ氏所蔵
図 124 現在の光明寺大慈院本堂	加西市教育委員会撮影
図 125 小野中学校で柔道を見学する捕虜	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 126 明治 36 年に竣工した寄宿舎	『百周年記念史誌—兵庫県立小野高等学校』（百周年記念史誌編集委員会編集、百周年記念事業実行委員会発行、平成 14 年 11 月）より
図 127 小野中学校鳥瞰図（大正 10 年 9 月作）	ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏提供
図 128 捕虜解放時と思われる播鉄大門駅	『大門誌』（大門誌編集委員会編集、兵庫県社町大門発行、平成 3 年 3 月）より
図 129 播鉄大門駅の配置図	ディーター・リンケ氏所蔵
図 130 神戸港に停泊する喜福丸	ディーター・リンケ氏所蔵
図 131 ヴィルヘルムスハーフェン	ディーター・リンケ氏所蔵
図 132 2006 年の展示会の開会式	石井大輔氏撮影
図 133 ウィーン軍事史博物館での演奏会	神戸大学大学院地域連携センター撮影
図 134 2011 年の展示会の様子	石井大輔氏撮影
図 135 南部公民館 世界の料理教室（ドイツ料理）	加西市教育委員会撮影
図 136 青野原俘虜蹴球交流戦再現エキシビション	加西市教育委員会撮影

お世話になった方々と機関

石塚太喜三 石野 茂三 大村 敬通 岡田 盛英 岡本 託 尾瀬 耕司 織井 孝昌
粕谷 修一 陰山 守男 神崎 壽福 岸本 肇 三枝 正明 坂江 渉 坂田 大爾
佐々木和子 塩河 信昭 立花 聡 堂野 修吾 内藤 正克 永尾 克 中村 仁美
西田 慎 人見佐和子 福島 幸宏 藤川 貴博 藤本 次子 藤原 龍雄 古川 益男
蓬萊 公平 松下 正和 村田 和繁 山下 明良 山中 留雄 山本 博利
ディーター・リンケ デルク・ファン・デア・ラーン ハンス＝ヨアヒム・シュミット
ペーター・パンツァー

(敬称略、五十音順)

オーストリア大使館／オーストリア文化フォーラム 小野市立好古館 社団法人ドイツ東洋文化研究協会
姫路市教育委員会 青野原町自治会 在大阪クロアチア共和国名誉領事館 加西市サッカー協会
NPO 法人ねひめカレッジ

参考文献

- Gerbert, Frank, *Endstation Sarajevo. Die letzten sieben Tage des Thronfolgers Franz Ferdinand. Eine Spurensuche von Böhmen bis Bosnien*, (Verlag Kremayr & Scheriau, 2014).
- Krumeich, Gerd, *Juli 1914. Ein Bilanz, Mit einem Anhang: 50 Schlüsseldokumente zum Kriegsausbruch*, (Ferdinand Schöningh, 2014).
- Rumpler, Helmut, *Eine Chance für Mitteleuropa. Bürgerliche Emanzipation und Staatsverfall in der Habsburgermonarchie*, (Ueberreuter, 1997).
- マイケル・ハワード (馬場優訳) 『第一次世界大戦』(法政大学出版局、2014 年)
- 小野市史編纂専門委員会『小野市史』第 2 巻、第 3 巻、(小野市、2003、2004 年)
- 大津留厚・福島幸宏編『AONOGAHARA 俘虜兵の世界』(『小野市史』第 3 巻別冊 (2004 年))
- 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界——第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵——』(山川出版社、2007 年)
- 大津留厚・奥村弘・長野順子『捕虜として姫路・青野原を生きる 1914-1919—箱庭の国際社会—』(神戸新聞総合出版センター、2011 年)
- 大津留厚『捕虜が働くとき——第一次世界大戦・総力戦の狭間で——』(人文書院、2013 年)
- 大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門——歴史のラビリンスへの招待——』(昭和堂、2013 年)
- 加西市史編さん委員会『加西市史』第 5 巻、(加西市、2004 年)
- 姫路市史編纂専門委員会『姫路市史』第 5 巻、第 13 巻、(姫路市、2002、1994 年)
- 藤原龍雄「第一次世界大戦と姫路俘虜収容所」(『文化財だより』第 50 号)(姫路市教育委員会、2003 年)
- 俘虜情報局『大正三四年戦没俘虜写真帖』(1918 年)
- 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『世界戦争 (現代の起点 第一次世界大戦第 1 巻)』(岩波書店、2014 年)
- 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『総力戦 (現代の起点 第一次世界大戦第 2 巻)』(岩波書店、2014 年)
- 『企画展示 ドイツと日本を結ぶもの——日独修好 150 年の歴史——』(国立歴史民俗博物館、2015 年)

青野原俘虜収容所開設 100 周年記念事業

加西に捕虜がいた頃 ―青野原収容所と世界―

発行日 2016 年 3 月 31 日

編 集 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（編集担当：石井大輔）

発 行 加西市教育委員会

〒 675-2395 加西市北条町横尾 1000 番地

印 刷 神戸大学生生活協同組合

